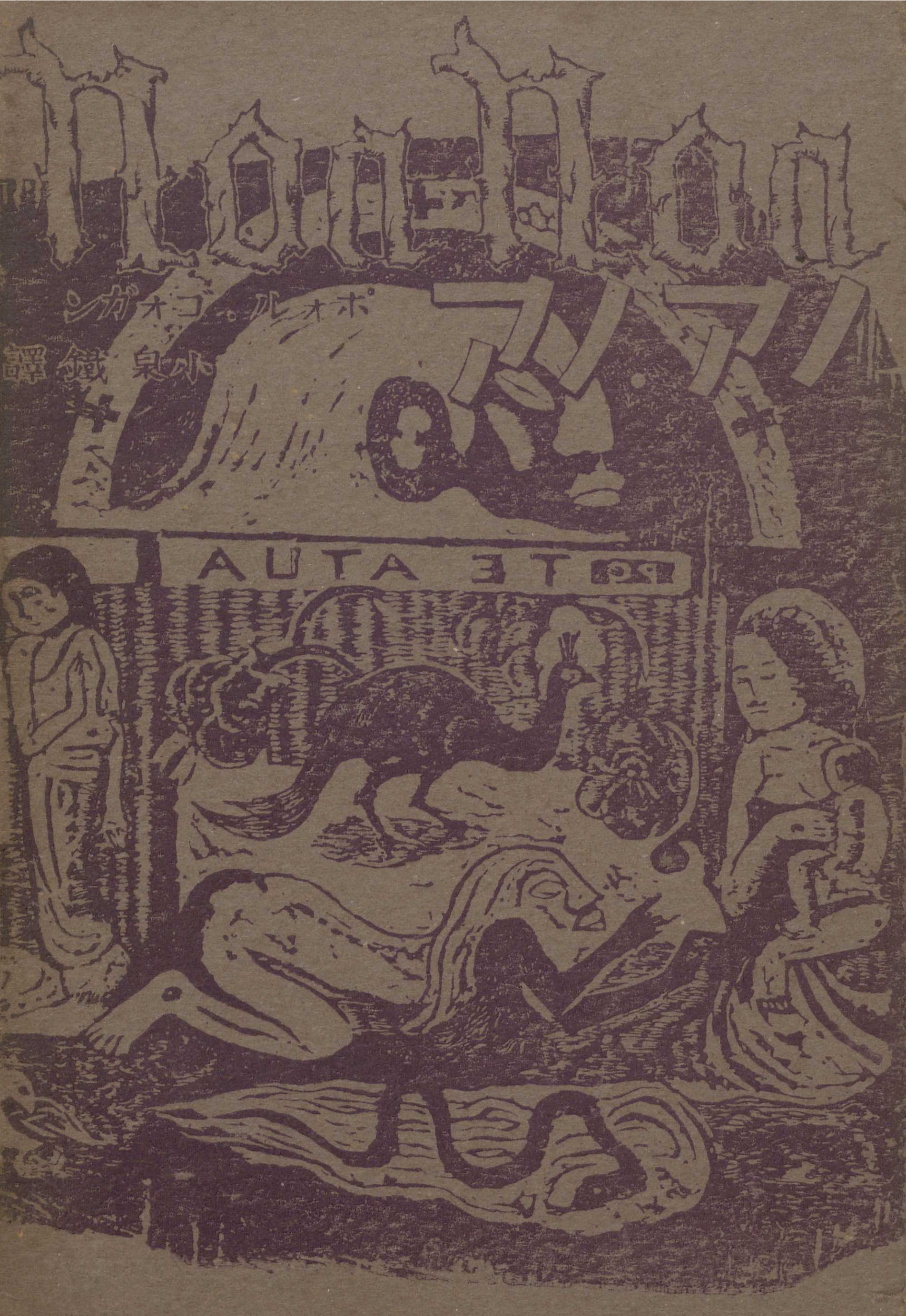

Noa Noa
ノア・ノア
ポオル・ゴオガン
小泉鐵譯



ポオル・ゴオガン著
小泉鐵補譯

ノア・ノア



マルタサス島にて

あなたの見たものを話して下さい。（シヤルル・ボオドレエル）

六十三日間の航海、待ちあぐんだ六十三日の後、私達は六月八日の夜半に波間に雁木なりに搖られて居る異樣の火光を認めた。鋸の齒形の刻をのこして黑い圓錐の柱は暗がりの空からとけて來た。

船はモレア Morea を周航り、タヒチ Tahiti は私達の前にあるのだ。

數時間して日はしらみだした。船は徐々と礁磯に近寄り、船路に

入り、恙なく船着に着いた。

最初見渡したところでは島のこの邊の様子には別に不思議なものはなかつた。たとへばリオ デ ジアネロ Rio de Janero のあの立派な入江にくらべるやうなものはなかつた。

ノアの洪水の時に浸された山の頂きがある。僅にほんの頂上だけが氾濫せる水の間から頭を擡げて居た……ある一家の人達はそこにのがれ、そこに新しい種族の基礎をおいた。――珊瑚蟲はそこに匐ひあがり、その頂きにかたまり、そして數百年の推移のうちに新らしい陸を作つた。それは何時までも何時までも大きくなつて行く。

然し孤獨と隔離といふ本來の特質を保つてゐる、そして海はあの無際限といふことのうちにはなほもそれらを高めて居る。

朝の十時に私は知事の黑人ラカスカアデ Lacascade に自分を紹介し

た。彼は私を一角の人物のやうにもてなした。

私はこの敬意を、フランスの當局が私に――何故かは知らないが――任せた使命のおかげだと思つた。勿論それは藝術上の使命であつた。然し黑人の眼にはこの言葉は政府の間者といふのと同意義であつた。それで私はこの嫌疑からのがれやうと努めた、が駄目だつた。知事の周圍の人達は誰も皆、いぶかしい顏をした。それで私の使命といふのは何も報酬を求むるものではないといつた時にも、彼等はそれを信じやうとはしなかつた。

パペエテ Papeete の生活は私には直ぐに苦しくなつた。まことや、こゝも歐羅巴であつた――歐羅巴。そこから私は解放されると信じ

て居たのだのに――そればかりではない、なほそのうへに、殖民地の蕪雜亂行と歐羅巴の道德、流行、罪業、文明愚のカリカチウアになつた馬鹿らしい摸倣の狀態にあるのだ。

私は逃げだしたもの、その物を見出さんがために、こんなにははるばるやつて來なければならなかつたのかしら。

それでも然しある思ひがけない出來事が私の興味をひいた。王のポマアレ Pomare はこの當時ひどくわづらつて居られた。その臨終の時が日々に待たれた。

都市は段々に不思議な外觀を呈して來た。

あらゆる歐羅巴人、それは商人にしろ、役人にしろ、士官にしろ、又兵隊達にしろ、皆は何時もとおなじやうに街上で笑ひ、唄つたけれど、土人達は眞劍な顏をして、打ちしづんだ調子で、宮殿の前に

語りあつた。

船着では、日光の直射を受けて烈しくかゞやき、銀色に光つて居る礁のつゞいた藍色の海に見馴れない橙色の帆の動くのが見られる。

それは附近の島々の土人達が、彼等の王様の最後の瞬間――彼等の土地がフランスに確實に領有せられる瞬間に遭遇しやうと急いでやつて來るのだ。

彼等は天の啓示によつて、その知らせを獲たのだ。一體何故といふに、何時も王様がおかくれになるといふときには、山が日沒の際に定まつたところが黑いまだらでおほはれるのだ。

王は死んだ。そして大提督の制服をつけて公衆の前に宮殿に安置された。

其の場で私は王妃のマラウ Maraü を見た――これは王妃の名であ

る――彼女は王の部屋を花や織物にて飾つた。――政府の葬儀係が私のところへ葬式の装飾上の準備の相談に來たときに、私は彼に王妃をすゝめてやつた。王妃は彼等の種族の美はしい本能で以て何處も彼處も自分の周圍を氣持好くこしらい、自分の觸れるところのものは何でも皆一つの藝術品にした。

けれど最初に會つたときに私の彼女を理解したところはほんの不完全なものだつた。私が彼女に望んで居たものとは非常にちがつた人間と事物、それらが私の迷を解いた。私はこの全くの歐羅巴風のくだらなさから嫌惡の情を起された。然し此の土地に來て暫くは、抑々歐羅巴舶來の贋美術的糞土のうちにどれだけの國民性、特有性、又は原始的美といふものが、この征服された人種の間に保存せられてるかを見極め得るには、私はまだ多くの點に於て盲目であつた。

私はこの旣にいくらか成熟した王妃に於ても亦唯氣高い美しさの跡のある普通の肥つた女としか見なかつた。然し私が後に再び彼女を見たときには最初の判斷を變じた。私は彼女のマオリ人特有の魅力の刺戟に征服された。いろ〳〵の雜種にもかゝはらず彼女にはタヒチ固有の型は純粹に殘つて居た。それで彼女の祖先、偉大なる頭領のタチ Tati への回想が彼女にも、又彼女の兄弟及びその全家族にも眞に凛とした偉大なるものの氣品を與へて居た。彼女はその人種の容儀正しい立派な姿をなし、大きく、若かも優美である、腕は寺院の圓柱のやうに單純ですつきりして居る。それから全體の體軀の造り、眞直な肩の線、上へつき出て居る首は思はず聖なる三位、三位一體のシムボルを想はせた——彼女の眼には時たまぼうと浮んで來る熱情のひらめきが見える。それは烈しく燃え、そして周圍のすべ

てのものを燃やす。――恐らく島自身がかつて太洋から頭を擡げ、最初の日光に島上の樹木の花を開いたやうに。

ありとあるタヒチの人々は皆黑の裝束をし、二日の間悲しみの曲、死の調を歌つた。私にはそれが激情的なソナタをきくやうであつた。

それから葬式の日が來た。

朝の十時に行列が宮殿を出た。白い胄、黑い衣の兵隊と役人、それに喪服をつけた土人とである。すべての地方々々の人民も列次をなして進んだ。そしてその各地方の指揮者はフランスの旗を擔つた。アルエ Aruë でとまつた。そこには形容することも出來ない紀念碑、セメントでかためられた石の見惡い堆積が突立つて居る。それが周圍と氛圍氣とに對して痛ましい對照をなしてたつて居る。

ラカスカァデは先例に倣つて演說をした。それを通譯が列席のフ

ランス人の爲めに飜譯をした。それから新敎の牧師の說敎があつた。それに王の兄弟のタチが簡單な答禮をのべた——それが全體であつた。人々は散じた。役人達は馬車に押しあひ突きあひ入りこんだ。

それがかう何か「競爭の歸り」の樣を想はせるやうであつた。

フランス人の冷淡さの方がさきに來たには來たが、四五日こつち眞面目になつて居たこれ等の人民も再び喜悅を見出した、彼等の頑丈な跣足が往來の塵埃をあほりながら、ヴヒナ Vahina はまた彼女等のタネ Tane の腕をとり、元氣好く話し、前後に腰をゆすぶつて步るつた。

ファテュア Fatüa 河の近くで皆が散り〲になつた。石と石との間に隱れて、此處彼處に女達は帶のところまで上衣をまくりあげて、腰や、步行と熱さから汚れた脚をきよめる爲めに水の中に屈んだ。か

く浄められて、女達は薄いモスリンの布で膨らかしたその胸を突きだし、若い健康な動物の美しさと彈性とを持して、堂々と再びパペエテへの道を進んだ。皆が髪につけた、まぜものゝ、半ば動物性の、半ば植物性の香、彼等の血とくちなしの花の香——チアレ Tiare——が彼等から流れて來る。

——Téiné merahi noa noa（今こそ芳ぐはしき香ぞする）と彼等は歌つた。

* * *

……私が患つて、パレオ Pareo たつた一つで床に横になつて居た部屋の中へ王女がやつて來た。眞當に地位のある婦人を迎ふる樣子ではなかつたのだ。

註――パレオとは土人の唯一の着物のこと

――Ja orana,（御免なさい）Gauguin, 御病氣でいらつしやるの。私はあなたにお會ひしたくつて參りましたの。

かう彼女はいつた。

――で、あなたは誰方ですの？

――ヴィテュア Vaïtũa です。

歐羅巴人が何もかも皆自分達の水平線までこき下してしまつた後に、なほ眞當の王女といふものがあるものなら、ヴィテュアこそそれだらう。勿論彼女は素跣足の尋常普通の人間で、耳の後には香のす

る花をつけ、黒い着物をつけて居た。彼女はポマアレ王の喪にあるのだ。彼女は王の姪であつた。

彼女の父のタマトア Tamatoa は士官や役人達と餘儀ない交際もし、海軍提督の待遇はうけて居るが、彼は王族のマオリ、憤怒の紀念碑の中の闘好きの巨人、夜會の名取りの大酒呑以外のものにならうとは一度もしなかつた。ヴイテヱアは彼に能く似て居るといふ評判であつた。

人を疑ぐるやうな薄笑が唇に動いた。私はこの島に上陸した歐羅巴人普通の圖々しさで以てこのやつて來た王女を觀察した。然し私は叮寧でありたかつた。

——來て下すつてありがたう。御一緒にアブサンでもやりませうか。

かういつて、私は部屋の隅の方の壜を指差した。丁度私はそれを買つて來ておいたのだ。

別に不機嫌な樣子も嬉し相な樣子も見せずに、素直にその方に歩いて行つて、その壜をとらうと屈んだ。この屈んだとき、その輕い透き通るやうな着物が腰の上にぱつと開いた、——その腰といつたら地球でもかつぎさうな腰であつた。眞當に王女らしい女だつた。彼女の祖先は？　傲慢で、勇敢なる巨人！　幅廣い肩の上には頑丈な首がのつかつて居る。初めには私は唯彼女の人間の肉を喰らう大顎、ものを裂き切るための廣い齒、陰鬱で、奸獰な動物の窺ふやうな眼差しを見たばかりだつた。彼女が奇麗な、立派な額をして居るにもかゝはらず、私はひどく見惡く思つた。

私の寢臺に坐はらうなどゝ彼女が思ひたゝないやうに！。勿論こ

んなに弱い臺が私達二人をのせることは何うしても出來ないことだ………。

然しちやんと彼女は寢臺にのつた。

臺はみり〳〵と音がしたが、然し大丈夫だつた。

飮みながら私達は二言三言話をした。然し話は捗々しくは行かなかつた。到當彼女は話に倦んで來た。そして沈默が支配した。私は内々王女を觀察した。彼女は眼角から盗むやうに私を見つめて居る。そして時はたち、壜は空らになる。ヴイテュアは盛にのむ。彼女はタヒチの煙草を自分で捲いて、それを喫ふために寢臺の上にからだをのばす。彼女の脚は全く機械的に始終下の臺の脚の木の上に届いて居る。彼女の顏附はやはらいで來、見かけは弱々しくなり、その眼はかゞやいてくる――そして正しく間をおいた口笛がその唇をもれ

て來る――それが私には獸的な歡樂の思に耽つて居る猫の唸きをきくやうであつた。

私は大變變り易いやうではあるが、今私は彼女が眞當に奇麗だといふことを發見した。「あなたは私を好き」と聲音を振るはしていつたとき、非常な不安が私を襲つて來た。王女は際立つて美しかつた……………。

私の氣に入らうとする爲めなのは疑ふまでもないのだが、彼女はラフォンテエヌの蟋蟀と蟻との物語を語り始めた――彼女を敎育した姉妹達の處に居た時分の小供の時の記憶なのである。

煙草はすつかり灰になつた。

――あなた御存じなの。と王女はいつて、「私はラフォンテエヌを好かない」とたちあがつた。

――どうして。あの善人のラ　フォンテエヌを。

――多分あの人は善い方でせうけれど、あの人の道德は善くない。蟻……（女の口には嫌惡の樣子が見えた）。あ、あ、蟋蟀、蟋蟀。唄え、唄え　何時もお唄え。

かういつて私を見向きもせずに、遠くを見入つてゐる輝いた眼をして彼女は威張つて附けたした。

――まだ何も賣られなかつたときには、どんなは私達の國は立派だつたらう。年が年中何時も何時も唄つてたのだ……唄はう、何時も。何時も與へよう………

そして彼女は行つた。

私はまた枕の上に横になつた。永らくの間 Ja orana, Gauguin といふ言葉が媚びるやうに私の心の中にあと鳴りをして居た。

王のポマアレの死と關聯して私の思ひ出のうちに殘つたこの挿話は、事件そのものや公儀の儀式よりも私の記憶のうちにより深い跡をのこしたのであつた。

パペエテの住民すら、土人も白人も直ぐ樣この死んだ人を忘れた。王樣の大葬に列するためにやつて來た近所の島々の土人もまた去つてしまつた。數千の橙色の帆は復も藍色の海を横切つた。そしてすべてはまた普段の歩調に返つた。

唯一人の王といふものさへ最早なくなつた。彼と共に古傳統の最後の跡は消えた。彼と共にマオリの歴史は卷を閉ぢた。マオリーの歴史は終つた。文明——兵隊と商賈と官僚——が勝ち誇つた、遺憾ながら。

深い〳〵哀愁が私の心を支配して來た。タヒチに私を運んで來た夢は現實によつて酷たらしく追ひ捲くられた。私は昔のタヒチを愛した、今のタヒチは私に恐怖を注ぎこんだ。

然し私は未だに保存されて居るこの人種の肉體上の美しさを見たときに、彼等がその昔の偉大、彼等の人情や自然の風習、彼等の信仰、彼等の口碑のうちから何も彼〻失はれたとは、私は信ずることは出來なかつた。たとへ何かそんなものが殘つてたとしても、その過去の痕跡を私が——全く私だけで——どうして發見することが出來やうか。何の道標もなしにどうして理解することが出來やうか。灰すらも散つてしまつたものから、どうしてまた火がとぼさるゝだらうか。

私は復もひどく絶望させられたけれども、私は決して私の計畫を

すてはしない、標的に達するが爲めには、無一物でも自分で『不可能』そのことすら探求して來たのが私の何時ものことなのだ。

私の決心は直ぐにきまつた。私は自分を歐羅巴張りの中心から遠のけるために、パペエテを去らうと決心した。

若し私が草叢のなかに土人の生活を一から十まで彼等と共にするならば、段々とマオリ人の信用を得るやうになり、そして——やがては彼等を理解するやうになるだらうと感じた。

かくてある朝私は、自分の小舍を見附けるために、役人が親切に私のために用だてゝくれた馬車で出發した。

チチ Titi と呼ぶ私のヴヒナは私をつれて行つてくれた。彼女はイギリスとタヒチとの混血兒で、いくらかフランス語を話した。この旅行には彼女は一番好い着物を着て耳の後にはチアレをつけ、上は

紐で結び下は稈細工の花と橙色の貝殼の飾をした木皮の帽子をかぶり、長い黑髮をほどいて肩の上からさげて居た。彼女は馬車で行くいふのが得意であつた。自分が非常に立派であるのと、又自分が溢れるばかりの力と何事でもなすことの出來る能力があると信じてゐる男のヴヒナであるといふ事とが得意であつた。そしてその得意でゐる彼女は眞當に美しかつた。其得意の中には何等輕蔑すべきものがなかつた。この容儀正しい容子は、この人種が支配した遠い過去の歷史や、偉大なる頭領の無終の系統を記憶して以て、その中に立派な誇りを保存して居るこの人種にはひどくふさはしかつた。——

彼女の大變氣を遣つた愛も、巴里の人の眼には賣物の娼婦の媚ほどにも天秤がきかないといふことを私は實際に知つてゐた。然しマオリの娼婦の情火は巴里の賣女の受動的なのとはまるでちがつたもの

であつた――眞當にまるでちがうのだ。彼等の血のうちには火がある。その本來の滋養分である戀情はそこに目醒め、そこに呼吸する。この眼、この口、利己であらうとなからうと、それは噓を吐くことは出來ないのだ。この口、この眼から語られるものは何時も何時も戀情だけである。

路は豐饒な、しかし變化のない土地を直ぐに通りすぎた。右には斷えず海があり、珊瑚礁があり、瀑がある。それらは波が岩と非常に猛烈に突きあたるといふと煙霧を散らした。左には大きい森林を望んで草叢がある。

午頃には私達は四十五粁も來た、そしてマタイエア Mataiea の地方に着いた。

私は其の地方を探し廻つた。稍々小奇麗な小舍が漸く見附かつた。

小舍の主はそれを私に貸してくれた。彼は自分が住む爲めの新らしい小舍をその傍に建築中であつた。

翌夕、私達がパペエテに歸つて來たときに、チチは、彼女を一緒につれて行くのを私が嫌つてはしないかといつて尋ねた。

――今に、二三日して、私の準備が出來さへすれば、と私はいつた。

チチは多くの情人を地下に葬つた後で、パペエテでは恐ろしい評判を有つて居た。然しこのことが私を彼女から外向かさせはしなかつた。彼女は半白であるのと、又種々の關係からして、この人種の根深い、固有の、マオリ人に純粹な特徵を有つてたにもかゝはらず、其の特徵を多くは失なつて居た。私が知りたかつたものを何にも彼女は敎へることが出來ず、又私が憧憬する選りに擇つた幸福を何も私に保證することは出來ないと私は感じた。

私が探し求めて居た、そして選ぶといふことだけが必要である或るものを私はこの土地で見出すだらうと秘に思つた。

* * *

一方からは海、一方には山脈、分峯をなした山脈、大きい谷がある。谷には岩に寄りかゝつた巨大なマンゴーの籔が蔽ふて居る。山と海との間にブウラオ木造りの私の小舎がある。それと列んで住むのではない第二の小舎がある、ファレアム(食堂)Fareamu なのだ。

朝。

海には岸に近く、私はピローヂ Piroge と、そのなかに半裸の女を見る。 岸には男が居る、之も同樣に裸だ。 萎ほれた葉をつけた勢のないココスヌス Kokosnuss（胡桃の一種）は金色の尻尾をたれ、粒の多い葡萄の房を爪にぶらさげて居る法外に大きい鸚鵡のやうだ。 男は調和のとれた身構をして兩の手で重い斧をあげる。 それは上では銀色の空に碧色の跡をのこし、下では伐り倒された樹幹に薔薇色の截目をのこす。 日となく時となく貯へられて來た數百年の熱火が瞬時の炎に甦へらされる。

註――ピローヂとは土人の樹の幹で作つた輕ろい小舟のこと

紫色の地面のうへの金黄色の永い蛇形の葉は私に神秘な、宗敎的な古經典の筆附きを想ひおこさせた。 葉ははつきりとオーストラリヤ語源の聖語アトゥア ATUA――神――タアータ Taita タタガタ Tathagata の

形をなして居た。それは到るところインディアン全體を支配したものである。そして私の美しい靜寂と淸貧のうちに神秘なる慰めを思ひ出す如くに更に私は賢者の言葉を思ひだした。

タタガタの眼には王者大官の燦たる威容も塵にすぎない、埃にすぎない。

彼の眼には淸純も不純も六のナガNagaの舞踊のやうだ。

彼の眼には佛を拜したい求めも花を求むるのに等しい。

ピローヂでは女が網をのべて居る。

海の藍色の線は珊瑚礁に碎ける大波の嶺の緣に碎かれては碎ける。

夕暮。

私は煙草を喫ひに、海岸を歩つた。

とく水平線に沈んでゆく太陽は私の右手に横はるモレアの島の後にすでに半をかくした。黄昏のなかに山は紫色の夕焼け空にくつきり黒く影を描いて立つた。そして山の突起が銃眼を以て飾られた古城のやうに見える。

人の心の支配者である幻映がこれらの自然の建築の前に自分を追ひやつたといふことは何の不思議もないことだ。地には、その山巓は巨大な兜の姿をなして居る。周圍に打ちよせる大波も、その音は大勢の群集の騷擾のやうにひゞきはするが、一度でもその山巓にとゞくことはないだらう。この廢墟のうちに兜だけが唯一つたつて居る。それは守護神であり、證人であり、天空の隣人である。私は上天にあつて隱れたる眼差を水中に浸して居る頭のあることを思ふ。

心のうちに樂器、昔の人の竹笛の面影を喚びおこした。それはマオリ人に知られ、彼等からヴィヴォー Vivo と呼ばれたものである。月と竹とがそれを誇張して描きだした。丁度それは晝は終日默つて居るが、然し夜は月のお蔭で夢見る人のその氣憶のなかに可愛いゝメロディーを想ひおこせる樂器のやうに。私はこの樂をきゝつゝ眠りにおちた。

天空と私を隔てるものといつてはパンダヌス Pandanus の葉の高い、薄すぺらな屋根の外には何もない。その屋根には蜥蜴が巣をくつて居る。

私はかの牢屋、歐羅巴風の家から遠くはなれて居る。

マオリの小舍は生命、空間、無限……からは人間を離間しはしない。

それはかつては罪を犯した生あるものゝ種族を鞭うつたものである。彼の口でもあらう廣い裂目から、私は反語と同情の笑が水上に漂ふのを感ずる。水、その下には過去が眠つてゐる。――

夜は急いでやつて來た。モレアはねむつた。

*

*

*

靜寂！私はタヒチの夜の靜寂を覺えた。

靜寂のうちに私は心臟の鼓動の外何もきかない。

だが、月光は小舍の前に同じ間をおいて列んで居る竹林を流れて私の寢台の上までも差しこんで來た。そしてこの似通つた影が私の

とはいへ、私はそこに非常な孤獨を感じた。

この土地の人達と私はお互に双方から探ぐりあつた、そして私達の間の隔りは同じであつた。

二日目から私の糧食の蓄はつきてしまつた。どうしやうか。金錢で必要なものは何でも皆見出せると私は信じて居たのだ。だが、私は自分がだまされてゐたのだ。私達は都會を離れるならば、直ぐに、生きんが爲めには自然に賴らなければならないのだ。自然はゆたかである、自然はしみつたれではない、そして誰にもその寶物の分配を拒ばまない。これらは無盡藏に木に、山に、海に貯へられてある。然し人々は高い木に攀じ、山に登り、重い獲物を擔ふて返ることを知らなければならない、人々は魚を捕へ、水に潜り、石に凝着してゐる貝を海の底ではがすことが出來なければならない――人々は知

らなければならない。出來なければならない。

私、文明人である私はこの點に於て遠く土人の後にたつて居る。私は彼等を羨やんだ。私は私の周圍に彼等の日々の必要以上には大した骨折を要しない——金には少しの心配もない——幸福にして平和なる生活を見た。自然の產物が各自の使用に供せられてる處に、誰から何を買ふのだらう。

私が空腹をかゝへて私の小舍の閾に坐り、落膽して私の境遇と、自然がそれ自身と文明人との間に置いた先きの知れない、恐らくは打ち超えることの出來ない障害を思ふてた時——その時私は身振りをしながら何か私に呼びかけて居る一人の土人に氣がついた。その非常に表現的な擧動が言葉の役をたした。そして私は私の隣の人が私を食事に招くのだといふことを知つた。首を振つて私はことはつ

た。私はその案内をことわつたけれども、それを受けたと同樣に考へられたので、私は愧ぢて小舍の中に歸つた。

四五分後に小さい女の兒が何もいはずに煮た野菜と水々した摘みたての綠の葉で奇麗に蔽はれた果物を私の小舍の前に列べた。私は飢えて居た。そして私も同じやうに何もいはずに、それを受取つた。直ぐ後で先きの男が私の小舍の前を通つたが、立ちとまらずに笑ひながら尋ねた。

——Pa'la?

『お前はもう充分か』といふことゝ私は推測した。

これが私と蠻人との間の相互の信用の初めであつた。

『蠻人!』、私がこれらの人肉を喰らう齒を有つた黑色の人間を見たときには、この言葉は思はず私の唇のうへにやつて來た。然し私は

直ぐに彼等の生のまゝの、不思議な優しさを認めた……たとへば穏かな伏目勝ちな眼を有つたあの銅色の首、ヂロモン Giromon の大きい葉の繁みの下で、ある朝私に隱れて見て居たが、私の視線が彼のと出會うと、逃げて行つたあの子供のやうな……

彼等が私にとつて觀察の對象であり、驚愕の原因であるやうに、私は又彼等にとつてそうであつた。何も知らなかつた人にとつては すべてのものは新らしかつた。何故といふに私は彼等の言葉も、彼等の習慣も、又最も單純な缺くべからざる手業すら出來なかつたのだ。——彼等の誰もが私にとつて蠻人であるやうに、私は彼等の誰にとつても一人の蠻人であつた。

そして私達兩者のうち何方が正しかつただらう。

私は仕事をしにかゝつた。そして各種のノートやスケッチを作つ

た。

然しその強烈で純粋な色彩をもつ景色は私を眩惑し、私を盲目にしてしまつた。私は何時もふら〳〵してゐた、そして求めに求めた……

然しその場合、私は見たまゝを單純に描き、余り顧慮せずに青のそばに赤をおくべきであつたのだ。小河や海岸の金色に彩られた姿は私を恍惚とさした。何故私は畫布の上にこの太陽の歡喜を捕へることを躊躇したのだらう。

おゝ！この古い歐羅巴張りの傳習よ。頽廢せる種族のかの恐るべき表現法よ。

タヒチ人の容貌の固有の特色といふものを、習得する爲めに、私は近處の女の一人、純粋なタヒチ血統の若い女の肖像を作らうと思

つた。

彼女は一日、私の小舍に入つて、私が部屋の壁に貼りつけてある畫の寫眞を見やうと思ひたつた。彼女はそれらを永い間見てゐた、オランピアをば全く特殊な興味を以て見てゐた。

――君にはそれがどう思へる? と私はその女に尋ねた。(私は最早フランス語を話さなくなつたが、その二月でいくらかタヒチの言葉を覺えた。)

近處の女は答へた。

――大變奇麗ですわ。

私はこの批評を笑つたが、彼女の言葉は私の心を動かした。彼女が一體美に對して理解を有つてたのだらうか。然し美の藝術の學校の先生達はそれに何といふだらうか。

感動は何時も思索に先立つものだ、その沈默の後で、彼女は突然附け足した。

――奥さんですの？

――あゝ。

私はこの虛僞を避けなかつた。おゝ自分が、美しいオランピアのタネ Tane！

彼女が珍らし相に數枚の初期伊太利の宗敎書を見て居る間に、私は急いで、彼女には見せずに、彼女の肖像をスケッチし始めた。

彼女は直ぐにそれを見附けて、澁面をして叫んだ――Aïia！（いや！）そして驅け出していつた。

一時間の後には彼女は奇麗な着物を着て、耳の後にチアレをつけて再そこに居た――それは媚びることからなのかしら。それとも一

且拒んだ後で進んで讓歩するといふ喜悅からなのかしら。それとも單にそれは人々が自分自身にそれを抑制して居る禁制の果實の誘惑であつたのか。それとも亦もつと簡單に何も外に理由のない、恐らくマオリ人には普通のほんの氣紛れなのかしら。

猶豫なしに私は仕事をした、猶豫なしに、そして熱心に。モデルの外的並に道德的の服從、暗示深い突差の拒むことの出來ない同意といふものが私の畫家としての態度にあるものなることを私は悟つた。

私達の從來の美學上の法則によると彼女は餘り美しくはなかつた。然し彼女は美しかつた。

彼女の顏附はラファエル流の調和のあるものであつた。唯一本の動く線のうちにすべての喜悅とそしてすべての苦痛とをおくことを會

得した彫刻家が彼女の口を肉付けたのだ。

私は急いで夢中で仕事をした。何故といふに私は彼女の同意をまだ當にするわけには行かなかつたから。私はかの大きな眼のうちに恐怖を、未知の人に對する願望、どんな歡びの底にも横はる苦い經驗の憂鬱、いはゞ克己といふ自分の意思ではない、氣高い感情のやうなものを讀むことを恐れた。若しもこんな女達が私達に彼女自身を任せる時には、私達に服從してゐるやうに見えはするが、然しそれは彼女達自身に服從してゐるにすぎないのだ、超人間的のもの——恐らくは神格的獸性を有つてるところの力が彼女達の中にはゐるのだ。

今は前よりも自由に、樂に働けるやうになつた。然し自分の孤獨といふことが私を苦しめた。私はこの土地で靜な眼差をした全くの若い女や處女、血統の正しいタヒチの女達を見た。然かもそのうちの二三の女は恐らく喜んで私とその生活を分つてくれたであらうが。——然し私はそれらの女達を說き伏せることを能うしなかつた。それらの女達はその確かりした、ぐらつかない眼差と、その動作の品位、誇らしげな態度とを持して私を實際に畏怖させた。とはいへ、すべての女といふものは捉へられたがつてるものだ。然かもそれが一字を足さず、文字通りに獸的に捉(maii)へられたがつてるものだ。すべての女といふものはしたい放題にされるといふことに不思議な願望を有つてるものだ。何故といふにこの種の男性の我儘なる所作を通じては女の意思は全く責任を有しないものだか

ら――一體女の意志表示といふやうなことは永續する戀の發端に於てさへなかつたものだ。此の最初に激動された力の底に、何か深い意味があるといふことはあり得ることだ。あの女達が野生の儘の魅力を有つて居るといふことも、亦あり得ることだ。私は勝手にこんなことを想像した。然し私は能うしなかつた。

でもまた若い女達の多くは病氣なのだ、野蠻人に文明生活への手引の第一步として歐羅巴人から將來された、あの病氣から襲はれてるのだとも思はれもする……

だが、老人達が彼女達の一人を指差して私に

――maü téra（これをおつれなさい）とかういつたときに、

私はなくてならない大膽といふものも、信用といふものも有たなかつた。

私はチチを再びよろこんで迎へやうと彼女にいつてやつた。
彼女はすぐに來た。
試は不幸に終つた。そして私は役人達の月並な奢侈に慣れたこの女と一緒に居て感ずる倦怠で、野蠻人の美はしい生活の中で私が既にどの位進歩をしてゐたかを測ることが出來た。
數週間の後にはチチと私とは永久に別れ〳〵になつた。私は再び一人になつた。

* * *

近所の人達は私と友達になつた。私は彼等と同じものを喰ひ同じものを着る。私が仕事をしないときには、私は單純と喜悅との彼等

の生活の仲間入りをする。その彼等の生活は時とすると不意に眞面目に變ることがある。

夕暮に人々は群をなして繁つた叢林の根もとに集まる。それを蔽ふて椰子の梢がかきむしられたやうにひろがつて居る。男も女も、老人も小供も一緒になる。彼等の中にはタヒチの血統のものも、又はトンガス Tongas の島や、更にはマルケサス Marquesas の島のものもゐる。彼等の體軀ののろい調子が木の葉の天鵞絨をなしてゐるのによく調和して居る。そして彼等の銅色の胸から打ちふるひながらメロディーがかたまつてくる。それが椰子の無細工な幹から濕り氣を帶びて投げ返へされる。それはタヒチの歌、イメネス Iménés である。

一人の女が始める、彼女の聲が群鳥の中の一羽の鳥のやうにたかまる、そしてあらゆる調子を通つて音階の最も高きにまで達する、

激しい抑揚をなしてたかまつたり、しづんだりする、そしてお仕舞には他の女達の聲を壓して翔けめぐる。まあいはゞ、他の女達の聲は翔けあがつて、彼女に隨ひ、忠實に伴奏してゐるやうなものだ。咽喉から吐きだすやうな蠻的な一度の叫びで、最後にすべての男達が一勢にその歌を終はる。

時々お喋舌りや歌うたひに小舍に集まつて來る。祈りを以て始められる、老人がそれを大概先きに唱へる、そしてその座に居るすべての人達がそれを繰返へす。それから唄はれたり、又は可笑しな話が物語られたりする。これらの物語の內容といふものは素敵な微妙なもので、なか〳〵摑み難い。それは彼等の純朴さによつて織物のなかに織りこまれた纖巧な部分で、それが彼等をよろこばすのだ。

たまには眞面目な問題や賢い提案の審査がなされる。ある晩などは次のやうなことがなされた。それを私は驚かずには聞けなかつた。——この私達の村には、と一老人が語りだした、此處彼處に倒れた家屋や崩れ落ちた壁や朽ちて穴の開いた屋根などが見られる。思ひがけなく雨でも降らうものなら、そこから濕氣が入りこんで來る。何故だらう？人は誰でも皆雨や嵐の前には守護される權利はある筈だのに。その屋根を修繕するには材木も木の葉もない。私は最早住めなくなつた小舍の代りに廣い堅固な小舍を共同に建てることを、申出す。私達はそれを片端からやつて行きたい。

その座に居た總ての人達は取り除けなしに喝采を以て彼に報ひた。

この老人の動議は衆口一致を以て受け容れられた。

悧巧で善良なる國民、その夕小舍に歸つて、私はさう思つた。

然しその翌日、私が前日決議された仕事の開始を知らうとしたとき、私は最早誰もがそんなことを考へてないといふことを知つた。毎日の生活は再び常道をふんで行つた。そしてかの賢い提案者から指示された家屋はもとのやうに倒れたまゝになつて居た。

自分の問に私は唯當の外れた微笑を以て答にした。

然し皺のよつた眉がこれらの幻想的な額の上に有意味な線を引いた。

私は面喰つたが、然し立派な教訓を野蠻人から受けたといふ感情を以て引返した。彼等が老人の提案に贊成したことは眞當に當然なのだ。恐らく彼等にはその決議をそれ以上に遂行しなかつたことも亦當然なのだ

何の爲めにするのだ。神々は自然の財寶をその忠實な信者に分ち

與へてやらうと、そこにお居でになるのだ。

——明日は？

——恐らく！何が起らうとも、太陽は今日と同じやうに明日も晴やかに、惠深く登るだらう。

それが呑氣で、淺果敢で、無定見なのか。それとも又恐らく深い哲理のあることなのか——誰が知らう？まあお前さん達はその贅澤にお氣を附けなさいよ。用心深いといふ口實で、そこに利益を見出したり、それを大切と思つたりすることをお氣を附けなさいよ。

生活は毎日段々よくなつて來た。私はマオリ人の言葉を今は可成り好く解りもするし、間もなくそう骨折らずに話せるやうにもなるだらう。

私の近所の人達は——三軒は直ぐ近くに、外の多くは各々に多少

はなれて――私を仲間の一人として見た。

砂利礫と續け樣に始終觸れてるので私の足は堅くなり、地面に慣れて來た。殆斷えず裸な私の體軀は最早太陽の下に居ても苦しくはない。

文明といふものが私を段々去つてゆく。

私は單純に考へ、隣人に對しては唯餘り嫌惡――彼を愛するといふよりは寧ろ――を感じないやうにした。

私は生活上のあらゆる歡喜――動物的にも。人間的にも――を味はう。あらゆる作りごと、あらゆる傳統、あらゆる習慣から自由である。私は眞理に近づき、自然に來たのである。目前に今日といふ日を有つてるやうに、確實に自由な、美はしい日が續いて、私の上に平和が降つてくれる、私は正則に發達し、そして不必要な事柄に

自分を煩はさない。
私は一人の友達を獲た。
彼は自分から私のところへやつて來た。そして低級な利己心が彼を私のところへ來るやうにさせたのでないことは確なんだ。
それは近所の一人で、素直な大變美しい若者である。
私の色着きの繪や木彫刻が彼の好奇心を呼びおこした。彼の問に對する私の答が彼を敎へた。彼が、私が繪畫を描いたり、彫刻をしたりして居るのを眺めてない日とては一日もなくなつた……
今でもなほ、こんなに時がすぎても私はこの眞實で無垢な自然人のうちに呼びさましたあの眞實で無垢な感情を喜んで憶ひおこす。
夕に、私が自分の仕事をやめると私達は一緒に語り合つた。彼は好奇心を抱いた若い野蠻人として私に歐羅巴人の生活、殊に情事を

尋ねた。そして一度ならず幾度も彼の問は私を當惑させた。然し彼の答は彼の問よりもなほ一層素朴であつた。ある日私は彼に私の道具と木片を一つやつて、彼に彫刻をやらせてみやうと思つた。當惑し、默りながら、初めは彼は私を見て居た。それから彼は私に木と道具とを返へした。そして素直に、眞正直に、かういつた。

『私は他人と同樣ではない、ある人達には出來ない、そして他の或る人達を必要とする事柄のあることを理解してゐます』と。

ジョテファ Jotefa はそれを私にいつた最初の人間であると私は信ずる――それは野蠻人か若くは小供の言葉である。一體人といふものは兩者のうち一でなげればならないのだ、そうぢやないか、藝術家が――大切な人間であるといふことを信ずる爲めには。

* * *

一度私は自分の彫刻の爲めに薔薇の木が欲しかつた。私は目の積んだ、堅い幹がほしかつたので、ジョテファに相談した。

——山へ行かなければ駄目です、と彼はいつた。私は好いのが澤山あるところを知つてます。いらつしやるなら、お連れしませう。貴方のお氣に入つた木を倒して　それを一緒に擔いできませう。

朝早く私達は出發したタヒチの道路は歐羅巴人には可成り困難なものだつた。それに山路をするといふことは土人にさへも辛抱努力

が大事だ。それが大事でないとは土人も思つては居ない。

二つの山、攀じ登れそうもない二つの嶮しい玄武岩の壁の間に裂目が口を開いて居る。そのなかを水が石礁の間を縫つて流れてゐる。その石礁は泉の出口を開くために側壁から崩れたものだ。小川にと大きくなつてゆく泉は石礁をこつき、ゆるがしまで、石礁を前へ前へと押しやつてゆく。やがては小河が急流となり石礁を引拐つて海へ運び去つてしまふ。

小川の兩岸には、屢々瀑布で中斷はされるが、路らしいものがある、その路は麵麭種の木、羊歯屬、椰子、錦葵科、棊蘭科、グアヴ、鬼羊歯類等の密生林や法外に大きい雜草の繁茂した中をぬけてゆく。それらは行けば行く程段々密生して、島の中央に達するならば、到底突きぬけることの出來ない密林になる。

私達は二人共裸で、薄青包のパレオを纏つて、手に斧をもつて行つた。そして道を切り開くために幾度も小川を横切らなければならなかつた。その道を私の先達は眼を以てよりは音を以て發見するやうに思はれた。何故といふに草や葉や花が夥しく群がつて地面をすつかり蔽ふて居るのだもの。

全くの靜寂が支配して居る。岩にする水の訴へるやうな音や、單調なさら〳〵とする音や、靜かな低い嘆聲のするにもかゝはらず——いや、それが靜寂を導いて來るやうに。

この森のなかに、この寂寥、この靜寂のなかに私達二人だけ居る——彼、本當に若い男の彼と、私、いゝ加減老人の、數多の幻影が魂の弱々しい呼吸をかきまわし、屢々の勤勞が體軀を衰へさせ、物質的にも、道德的にも不健全な社會にその罪業、この老衰せる因果

の遺産をのこされた私と！
Androgyne の姿の動物的に柔順な溫情を持して彼は私の前を行く。私は周圍の一切の植物の精華が彼に具現して閃めき、生きてるのを見るやうに思つた。
私の前、そこを行くのは、それは人間なのだらうか。彼の性質の單純と複雜とが同時に私の心を惹いたのは、それはあの小供らしい友達なのだらうか。恐らくこれは森自身ではないんだらうか、生きものゝ森、無性のそして——人の心を拐かすそれではないんだらうか。
これらの裸體の人種にあつては兩性の差異といふことは、私達の風土に於けるとはちがつて動物に於けると同じやうに、大して問題にはならないのだ。帶と胴當とで私達には女性から變態、人爲的性質といふものを作るやうになつたのだ。人爲的性質とは自然をして、

遺傳の法則に從つて私達を複雜ならしめ薄弱ならしめたものだ。それを私達は心を配つてその神經の脆弱と筋肉の未發達の狀態を維持して居るのだ。即ち私達はその性質を疲勞といふことで守り、そしてその性質から發達といふ機會を奪つたのだ。そこで私達文明國の女といふものは、姿が好いといふ奇態なる理想に依つて作られて——そこに私達も往々にしてこだはる——彼等女性は私達男性と共通するものを何も有たない。それは恐らく眞面目な道德的、社會的の不都合なしにはすまないだらう。

タヒチでは森や海の空氣が肺臟を丈夫にし、肩幅や、腰を廣くする。男も女も太陽の光線、海岸の砂利礫から決して容赦されない。彼等は同じ仕事を一緒に同じ勤勉を以て、同じく得心して働く。そこで女に男性的のところがあり、男に女性的のところがある。

この兩性の近似といふことが兩性間の關係を輕める。そして何時も裸體であることが、その風習に自然のまゝの無邪氣と全くの純潔とを與へる。何故といふに人の心が危險なる神秘に心を勞するといふことがないからである。神秘とは幸福な僥倖といふことに意味あらしめるものだ。そして彼等には文明人の間にある情事といふことの內密な、潰れた性質がないのだ。男と女、戀する人としてよりは伴侶であり、むしろ友達である男と女は喜悅と勞苦のうちに殆たえず一緒に生活し、そして罪過といふことに就いてはその概念さへも彼等は知らないのだ。

香と光とに醉つて、老いたる文明人の心に今や突然新奇と未知との魅力を以て僅かばかりの兩性上の差異にもかゝはらず、かの恐るべき慾望が何故おこつたのだらう。

私の顳顬のところが動氣を打ち、膝がわく〳〵した。然し道が行きつまつたので、私の道連れは小河を横切る爲めに身を轉じた、そのとき私の方を向いた。アンドロギーネは消えた。私の前を歩み行くのは、それは眞實の若者であつた。彼の平靜な眼は流れの潤のある明るさを有つて居た。

直ぐ樣又和平が私の心にやつて來た。

私達は暫らく休んだ。私は感覺的よりはむしろ精神的の限りない快感を、私が奇麗な水に浸つたときに感じた。

―― Toëtoë（これは冷たい）とジョテファがいつた。

――いゝや、と私が答えた。この叫び、私が全く頽廢した文明に對して今や心のうちにおこして居たその戰の最後に適したこの叫びが森のなかに大きい木精を呼びおこした。そして私は自分にかういい

つた、私は自分の戰つたのを見た、自然は私の心の言葉をきゝ、それを理解した。何故といふに今自然は私の勝関に、自然はこの試練の後に私を彼女の小供の列にとり入れることを欲するといふ、はつきりした聲を以て答へてくれた。

私達はなほ前進した。そして私達は激情的な熱心を以て益々深く草叢のなかに進み入つた。丁度それに依つて私がこの大きい、母らしい自然の心臟のなかに突き入り、そして私が自然の生ける要素と一つになることが出來たやうに。

平靜な眼差をして私の道連れは何時も同じ歩みを私の前に運ぶ。彼は何等の疑念なく、私は汚れたる知識の責苦を一人擔ふ。

私達は目指す場所に着いた。

山の嶮しい岩壁が段々に平になつた。樹木の密生した幕の後に、

隱れてといふ方がよささうに、高地がひろがつて居た。然しジョテファは位置をよく知り、驚く程確に私を案內した。

澤山の薔薇の木がそこに彼等の頑丈な枝をのばして居た。

私達は最も美事なのを斧を以て倒した。そして私の注文に合つた枝をとる爲めに木全體を犧牲にしなければならなかつた。

木の倒れるのが私を愉快にさせた。心のうちに眞當の滿足と嬉しい昂奮とを感じて、私はこの神々しきまでに亂暴な慾求を如何にみたすべきかを知らなかつた。私は手を血に汚した。私は樹木を征服はしない。私は彼を屠り盡くさうとは思はない。然しそうはいふものゝ私は地面にこの木が倒れると又他の木に私の斧にする響をよろこんできいたのだ。

そしての斧が反響する聲音の節をつけて私に語つたところはかう

であつた。
森をすつかり打倒せ。
悪の森を根こそき無くなせ、
その萠芽は毒のある呼息をお前にふきこむ。
お前のうちにある利己の愛を打ちくだけ。
悪を打ちくだき、それをふみにじれ、
秋のロトスの花のやうに！

眞當にこの時から年老いた文明人は消えた、死んでしまつた。私は生き返つた――恐らく別の人間が、無垢な、强い人間が私の心の中にたちあがつた。

この恐ろしい發作は文明との、卽ち悪との最後の訣別であつた。

すべての凋落せる心の奥底に眠つて居る頽廢された本能のこの最後の證跡が、この對照に依つて、それを以て第一歩をおこした、この生活の健全なる單純といふことを、言語に絶する喜悦の感情にまでたかめたのだ。

慾深く私はこの美しい、汚れない空氣をすつた。この時私は別な人間だつた。眞當の野人、純粹のマオリであつた。

ジョテファと私はマタイエアに歸つた。氣を附けて、一緒に重い薔薇の木の荷、noa, noa！を擔いで！

私達が非常に疲かれて小舍に着いたときにはまだ太陽は沈まなかつた。

ジョテファは私にいつた。

——Païa ?（滿足）

――あ、と私は答へた。

そして私の心の奥底で私は自分に繰返した。

――あ！

私は何時だつて勝利と復活の香 noa. no 一を吸ふことなしにこの薔薇の木に彫刻をすることゝてはなかつた。

プナル Punaru 谷――タヒチを二つの部分に分つ深い裂目――を通じて人々はタマノユ Tamanoü の高地に達する。そこからディアデム Diadem オロフェナ Orofena, アロライ Arorai ――島の中央を見ることが出來る。

人々は私にそこの不思議を話した。それで私は一人で行つて、そこに二三日逗留しやうと企てた。

――然しあなたは夜はどうなさるのだ！

――テゥパパユス Tupapaüs があなたを襲ふだらうが？

――人は山の御靈を邪魔してはならない。

……お前は氣が狂つたのだ！

註 Tupapaüs とは死んだ人の靈魂、惡鬼、夜魔のこと。

私は恐らくそうなんだらう。一體タヒチの友達の心をおどろかした不安が却てなほも好奇心を煽りたてたゞけだ。

ある夜私は未だ明けないに出發した。

殆二時間私はプナル河の岸の小徑を辿ることが出來た。然し私はそこで幾度も河を横切らければならなかつた。兩側に嶮しい岩壁が大きい石塊や柱で支へられて、流れの眞中まで突き出て居る。

到當河の中央を私の道をすゝめるといふ外なくなつた。水は膝の

ところまである、往々にして肩までもある。下から見ると驚く程高く、上方で大變近く接して居るやうに見える兩壁の間に太陽は眞晝中殆ど見ることは出來なかつた。午頃に私は濃青色の空に光つて居る星を見つけた。

五時、暮れかゝつた頃私はいくら疲かれて、右の方に、羊齒、野生のバナナ、ブウラオの草叢のある稍平な土地を見た、そのとき私は夜は何處に過ごさうかといふことを考へだした。私は幸福にも僅かの熟したバナナを見つけることが出來た。そして食事をとゝのへる爲めに焚火をした。

そこで私はバナナの木の一番下の枝の上に寢に横になつた。それはうまい具合に行つた。そしてバナナの木の葉を雨の用心の爲めに編みこんだ。

寒かつた、水の中を歩るいたあとなので惡冷がした。眠は惡かつた。

然し朝はもう遠くはない、そして人間も獸も恐いことはないといふことを知つた。此處タヒチには猛獸も毒蛇も居ない。唯一つの野生の獸は野原に自由に生きて居る猪である。私は高々私の脚をおそはれるくらゐを恐がればいゝんだ。その爲めに私は手に斧の柄を握つて居た。

夜はくらかつた。黑白を分つことは出來なかつた。そとに私の頭に近く燐光を發する粉のやうなものがある、それが私を不安にした。テゥパパユス、眠つて居る人を襲はふ爲めに暗のうちに目醒めて居るといふあの惡鬼のマオリ人の話を考へて笑つた。彼等の領分は山の心腹にあつて、森が永遠の蔭にそれを蔽ふて居る、そして彼の領土

はすべて死んだ人の靈魂によつてたえずひろめられる。
惡鬼の住む土地に生くる人よ、悲しきかな！
私はこんなに狂勇であつた。
私の夢想は勿論甚だしく調子が高まつて居た。
この光つて居る粉は小さい特種の香菌類から發してくるのを、今私は知つた。それは丁度朽ち腐つた枝の濕つた場所に、私が轉火材に用ひたあれのやうに生えるのだ。
次の日は私は早朝又道をすゝめた。
小河となり、急流となり、瀑布となり、始終移り變つた姿になる流が不思議に氣六ケしく曲つて、時々は逆流するやうに見える。私はたえず道を失つた。幾度も枝から枝へ手を以てからだを前へ泳がせなければならなかつた。その時地面にからだのふれることは稀で

ある。

水の底から法外に大きい蟹が高く私の方を見て居る。それがかういふやうに見える、「お前はこゝで何をしてるんだ」――そして百年もたつた鰻が私の近くをにげる。

道を急に折れ曲ると突然私は、突き出た岩に、若い裸の少女のもたれて居るのを見た。それは岩を支えにして居るといふよりは、むしろ兩手を以てそれを愛撫して居るのだ。岩の間の非常に高くから石の間にさら〳〵と音なく流れてくる泉から少女はのむ。

それをのむと、兩手に水を汲んで、胸の間にそれを流す。そして――私が唯の少しの音もたてないのに――それは本能的に危險を嗅ぎだす臆病な羚羊のやうに頭をたれて、私が動かずにたつて居る草叢の方を見る。私の眼は少女のとは會はない、然し少女は Taähaë!

（おゝ、ひどいこと！）と叫んで水にもぐる、その時にも彼女は私を殆と見なかつた。

私は水にとびこんだ、誰もゐない、何もない――唯川底の小さい礫の間に腹ばつて居る大きい鰻だけが。

骨に骨を折つて私は到當アロライ、恐がられて居る聖山の頂き近く着いた。

それは夜であつた、月はあがつた。月が山の荒涼とした山額をその微光のうちに柔くつゝんで居るのを見たときに、私は名高い話を想ひだした……

Paraü Hina Tefatou（ヒナはテファトウに話した）といふ一つの古い古い物語を、それを少女達が夕によろこんで語り、その舞台として少女達は私が居るその場所を正しく指し示すだらう。

眞當に私は今その舞台を見てるやうに思つた……

神人の力に滿ちた頭、自然が彼の力に就いて恐ろしい自覺を與へたところの勇者の頭、すべての家の入口にあるやうな雄々しい巨人の顏を。そして神樣の髭に輕くふれ、かう話して居る內氣な優しい女を……

——人間が死んでも、も一度彼を蘇生せて下さい……

神樣の嚴格な、然し殘忍ではない唇が答へる爲めに開く……

いや、私は彼を蘇生せないだらう。人間は死ぬだらう。植物は、それに養はれて居るものが死ぬやうに死ぬだらう。地球は降るだらう、地球は降るだらう、二度と立ち上らない爲めに。

ヒナは答へた……

——どうぞお氣に召しますやうに。私は然し月を復も登らせませう。

ヒナに屬するものは、生きることをつゞける。テファトウに屬するものは降る。そして人間は死なゝければならない。

＊

＊

＊

暫くこつちといふもの、私は消氣返つて居た。そんな有樣で自分の仕事は行きなやみの態だつた。實際私には自分を助けてくれる樣の大事な救治劑がなかつたのだ。藝術上の任務、それは嘗ては自分を有頂天にしたものであつたのに、今はそれに無氣力に立ち向つて居るのだといふことが自分の機嫌を損じたのでもあるが、然し先づ第一には私には歡樂（よろこび）が缺けて居たのだ。

數ケ月こつち私はチチと別れて居るのだ。それでそれからこつち

といふもの、もう私は同じ事柄や同じ問題にあれ、あれが氣隨氣儘に小供らしく、能く口を動かしてたお喋舌をきかないのだ。それに私は何時も同じ物語をして答へて居たのだが。

そしてこの寂寞が私の爲めにはよくなかつた。私は先へ行かう、別にきまつた目當とては定めなかつたのだが、島巡りをしやうと決心をした。

私がその準備――旅に入用なもの丶僅かばかりの輕い包――をなし、自分の勉强を整理して居る間といふもの、私の隣人で友達だつたアナニ Anani は不安らしく私を見守つて居た。永い間のためらひ、話しかけやうとしてはまた中止したといふ態度、その態度のはつきりとしてくもりのない處が自分を大變よろこばせ、又同時に心を惹いたのだが、そんな態度の後で、彼は到當決心をして、私が旅立ち

の準備をして居るのか、どうかを尋ねた。

――いゝや、唯ほんの數日の旅がしたいんだ、と私は答へた。

私はまた來る。

彼は私を信じない、で泣きだした。

彼の妻は妻で彼と一緒になつて、彼等が自分を愛して居るといふことをのみこませやうと、彼等の間に生活するには私は少しのお金もいらないのだといふことや、お前さんが又好いとお思ひのなら、永遠に何時もあそこに休むことが出來るのだ――彼女は彼等の小舍の側近くの小さい木で飾られた墓場を指した――とゝふことを語つた。

そして突然私に――そこに――眠れといふことを願つた。其處でなら少なくも私を永遠に誰も邪魔するものはないだらう…………

――あなた方歐羅巴人は可笑しい。あなた方はいらつしやる、あなた方は此處に居るとお約束をなさる、そしてあなた方を皆が好きになると、あなた方はまた行つておしまいになる。かうアナニの妻は附け足した。

あなた方はまた歸つて來るためにとおつしやる。然しあなた方はもう決して歸つていらつしやらない。

――でもとに角こん度はまた歸つて來る心算だといふことを誓ひませう。

後になつては（私は能う噓を吐かうとはしなかつたのだ）、後になつてはどうするかはまだ私は知らないのだが……

到當彼等は私を去らしてくれた。

*　*　*

私は海岸に沿ふて路から遠ざかつて、深い草叢のなかを通ずる狹い徑を辿つた。その徑は數時間の後には小さい谷間の村に達した程遠く自分を山の中に導いた。そこの土人は古いマオリの風習に從つて生活して居る。

彼等は靜に幸福である。彼等は幻を描き、彼等は愛し、眠り、歌う——彼等は祈る。そしてキリスト教はまだ此處までは這入りこんでなかつたやうに見える。はつきりと私は、事實にはとうの昔に消えてしまつたとはいへ、彼等の神々の像を目前に見る、ことにヒナの像を、月の女神を祀る祠を見る。唯一つの木から出來てる神樣の

像は肩から肩まで十呎もあり、丈の高さ四十呎もある。その頭には帽子の形をした赤い色の大きい石を戴いて居る。その像の周圍でマタムア Mata-mua の古い儀式によつて踊がされる、そしてヴィヴォーがその時その時の色合によつて、よろこばしげに、晴れやかに、又は陰氣に、そして又悲しげにその音を奏する……

私は自分の道をなほ進めた。

タラヴォ Taravao ——島の反對の側の一番の端で、マタイエアから一番遠く隔つた草叢——で憲兵が私に馬を貸してくれた。それから私は今まで歐羅巴人からは餘り尋ねられなかつた海岸に沿ふて馬を走したら。

名高いイチア Itia の手前にある小さい村のファオネ Faone で土人が私に呼びかけた。

——もし〳〵人間を作る人！（彼は私が畫家であることを知つて居る。）Haäre mai ta maha（いらしつて、私達と一緒にめしあがれ。これが客を饗應(もてな)すタヒチのきまりなのだ。）私は自分にいやとはいはせなかつた、人を招く笑が氣持好く、心からなのだもの。

私は馬からおりた。その主人は馬の手綱のところをとつて、それを物々しくなく、巧に木に結へた。

それから私達は連れだつて小舍のなかに這入つた。そこには男も女も話したり、煙草をのんだりして地面(ちべた)に坐つて居る。その周りには小供等がはねたり、騒いだりして居る。

——貴方は何處へいらつしやるの？と奇麗な四十ばかりのマオリの女が私に尋ねた。

――イチアへ行かうと思つて。

――何をなさりに？

どんな考が私の中にあつたか、又恐らくは自分にも今だに隱されて居る、眞當の旅行の目的を何と名づけやうか、私は知らないのだ。

――其處で妻を探さうと思つて、と私は答へた。

――ファオネにだつて澤山そして奇麗なのが居ます。貴方はその一人をほしくない？

――あ？

――まあ嬉しい！　あれがゞ貴方のお氣に召すなら、あれを貴方にあげませう。といふのはね、私の娘ですが。

――若い？

――え。

――奇麗？

――え。

――丈夫？

――え。

――それは好い、行つてつれて來なさい。

その女は直ぐに出て行つた。

四半時間ばかりすぎて、食事――野生のまゝのバナナと蟹――が運ばれたときに、先きの女が若い少女を連れて又這入つて來た。少女は手に小さい花束を待つて居た。

透き通るやうな薔薇色のモスリンの着物をすかしてその肩や、腕の金色の皮膚が見える。二つの蕾がはちきつてその胸に高くなつて居た。驚くべく釣合のとれた、すらづとした、大きい、丈夫な小供

であつた。然しその奇麗な顔には、島の他の場處で何處でゞも出會はすやうな、例の型といふものは私には見出せなかつた。髮も亦普通見慣れないいもじやくして、輕く波をうつて居る。日光の中にすべてこれ等がクローム色の眞當のオルギーを呈する。

この少女はトンガスの生れだといふことである。

私は挨拶をした。少女は笑つて私の側に坐つた。

——私が恐くない？と尋ねた。

——Aïta（いゝえ）

——私の處に何時までも居られる？

——Eha（はい）

——病氣をしたことはない？

——Aïta！

それだけである。

少女が平氣で私の前の地面に大きいバナナの葉に食物をのせて私のために配つてくれてる間といふもの、私の心臟は波うつた。私は大變うまく喰べた。然し私は落付かなくなり、ひどく昂奮した。この十三ばかり（歐羅巴にすれば十八から二十の）の小供が私の心を惹き、怖氣させ、殆と恐がらすばかりだつた。彼女の心のうちに何が去來するのだらう。そして私、この少女に較べてはこんなに年を老つた私はこんなに急に決せられた申出に承諾をするのを暫く躊躇した。然しその場合有利な條件はすべて私の方にあつたのだが。

恐らく――かう私は考へた――少女は母の命令のまゝであらう。恐らく彼等が自分達の間で同意した行爲であるとすれば……

私が若い少女の顔附のうちに、その態度仕草のうちに、この人種

に固有な眞當の獨立と自負とのかつきりした表示を認めたときに私は元氣附けられた。私がなほ深く研究して明にこの少女の明るい表情をたしかめたとき、私の信任は完全で、動かないものとなつた。表情といふものは若い者にあつては何時も貴い、可愛らしい所作をひきおこすものだ——唯この少女の奇麗な、優しい、あだつぽい口もとの人を蔑すんだやうな線だけは私にこんな警戒をさせた。それはこの冒險をやることの眞に危險は唯私の上にあるんで、彼女にはない……

私がこの小舍の閾を跨いだときに妙に自分の胸を抑へつける懸念から不安に堪えなかつたといふことを私は拒めない。

出發の時間が來た。私は馬にのつた。

少女は母と一人の男と二人の若い女——話しによると叔母達——

とに連れられて、私の後につゞいた。

私達はタラヴォに向つて歸つた。其處はファオネから九粁はなれて居る。

最初の一粁を來たときに、彼等はいつた。

――Parahi téié（こゝでとまつて）

私は馬からおりた。私達六人は大きい、奇麗に行屆いた。なかなか有福らしい、美事な蘆のしかれた小舍に入つた。

まだ若い、大變愛らしい夫婦がそこに住んで居た。私の花嫁はその側に坐はつて、私を紹介した。

――これは私の母です、かういつた。

それから沈默の間に杯が奇麗な水でみたされた。それを私達は順順に古い信心深い慣習に從つてお祝儀にのんだ。

その次には私の花嫁からその母として引合された、情に激した眼差しと、涙にしめつた睫毛とを有つた女が私にいつた。

——貴方は善い方ですか？

私は自分の良心を吟味して當惑せずには答へられなかつた。

——そうありたいものです。

——私の娘を仕合せにし下さるでせうね。

——え。

——八日目にあの子は歸らなければなりません。若しあの子が仕合せでなかつたら、あの子は貴方をすてるでせう。

私は身振りで承諾を與へた。皆が默つて居る。誰も能うこれを破るものはなかつた。

到當私達は外に出た。私は又馬に乘つた。前と同じやうにずうと

お供につれられて更に出發した。

途中で私達の家族を知つて居る澤山の人に會つた。彼等はとうにことの次第を知つて、少女に挨拶するやうにいつた。

——今日はもう眞當にフランス人のヴヒナになつたのか。おめでたう。

一つのことが私を不安にした。どうしてテフラ Tehura（私の妻はかう呼ぶのだ）は二人の母のものなのだらう。

私はあれを自分にくれた第一の母に尋ねた。

——何故あなたは嘘をいつたのか。

テフラの母は答へた。

——私は嘘は申しません、あれもこの子の母です。あれはこの子の乳母なのです。

タラヴォで私は憲兵に馬を返へした。そこに痛ましいことがやつて來た。憲兵のかみさんのフランスの女が、輕蔑はしないが無切棒に私にかういつた。

——どうしたつていふんでせう! 貴方はまあこんな人なんかつれていらつして?

そして惡意を有つた彼女の眼が若い少女を穴のあくやうに見つめた。少女はこの侮辱的な穿鑿に全く平氣で向つて居た。

私はこの刹那二人の女の與へてくれた象徵的の芝居を觀察した。

こゝ、少女に處女の盛時と信仰と自然とがあり、かしこ、フランスの女に乾燥と束縛と作り物とがある。二つの敵對せる種族は相向つてたつた。そして私は自分の種族のことを恥ぢた。私はあのフランスの女をこんなにも小さく、無知と見るのが苦しかつた。それで私は、自分が既に〳〵愛して居た他の種族の光輝、この生き〳〵した金色によろこび、熱しやうと急に振り向ひた。

タラヴオで家族は樣々とり合せた酒や果物、武器や織物、男や女や家畜、すべてのものが便せられる支那人の處で私達と別れた。私の妻と私とは、マタイエアの私の小舍まではその先き二十五粁あつたが、そこを馬車を利用した。

私の妻は大變お諜舌といふでもなく、又同時に晴やかさもあり、陰鬱なところもあつた。然しその中で人を蔑すむところが勝つて居る。

私達はお互に探ぐりを入れることをやめなかつた。然し彼女は測り知るべからずであつた。そして私はこの戰では直ぐに負かされた。鋭い觀察者とならんが爲めに、自分を看守し、支配しようといふ善き計畫も私には餘り役にたゝなかつた。私の力は直ぐ樣行きつまつた――そして私はテフラにとつては忽にして謎のない明ら樣な書物となつた。

そうかうして私はまあ云はゞ犧牲を拂ひ人格を代償にして、オーストラリア人の心とラテン人種、ことにフランス人の心との隔りである、深い陷缺を認むるに至つた。マオリ人の心は直下に自分を明

ら樣にするやうなことはない。その心を捉へるには大きい忍耐と硏究とを要する。そして底の底から解かつたと思ふときですら、彼等の心は全然豫見することの出來なかつた飛躍を以て諸君を驚かす。最といつてもマオリ人の心は謎その物である、いやむしろ謎の限りない連續である。その心を理解したと思ふ瞬間に、その心は快活といふ外套のなかに隔たり、達することが出來ず、近寄ることが出來ないのだ。かと思ふとこん度はその心諸君が僅ばかりでも確實さを裏切らうものならば直ぐ樣、又も滑り去る爲に自分から近寄つて來る。そして諸君がこんな仕打ちによつて困らされて、その奥の〳〵眞底を求めてる間といふものは、その心は打ちこはすことの出來ない嬉しさうな確信と、心配のない輕快さを以つて諸君を眺めて居る。それは恐らく見掛よりは純正なものではないのだが。

私としては、自分の生の喜びを斯程に妨げる無益な穿鑿を直ちに放棄した。私は全く信頼して時の經過に、最初の機會に拒まれた其の表白を期待するしかなかつた。

一週間はこんなことですぎた。そして私は嘗て以前に感じたことのない「小供らしい」感情を抱いた。

私はテフラを戀してたのだ。そのことを彼女にいつた。然しそれは彼女を笑はせた。彼女は私の戀を知つたのだ、あ、そうだ！彼女も私を愛するように見えた。然し彼女はそのことについては何ともいはなかつた――然し時折り夜にテフラの皮膚の金色が光つた……

八日目に……私には此の家に連れだつて來たのは、たつた今のやうに思はれた――テフラはファオネの母を訪ねたいと許可を乞ふた。

それは約束したことであつた。
私は不安になつて來た。私は彼女のハンケチにいくらかのお金をつゝんでやつた。それで彼女は旅の費用と父への糖酒の代を拂ふことが出來るのだ。そして彼女を馬車で送つた。
私は永久に別れる感じがした。
その後の毎日は不安であつた。
寂寥は私を小舍から追ひだし、追憶は私を再びそこに呼び戻した。どんな勉强も私の考へをすつかり縛つてしまうことは出來なかつた
……
次の週間がすぎた。そしてテフラは歸つて來た。
それから全く幸福な生活が始まつた。幸福と仕事とが太陽と同時に始まり、太陽の如く輝いた。テフラの顏の金色は私達の小舍の內

部、周圍の自然を喜悅と快活の光を以て照らした。彼女は最早私に探りを入れはしない。私も彼女にしない。彼女は最早私に自分の戀を隱せなくなつた。そして私は最早自分の戀を彼女に語らなくなつた。私達二人は全く純朴な生活をした。

朝には近くの小河に體を淨めに行くといふやうなことをどんなに嬉しくやつたらう——丁度それが天國で最初の男と最初の女とがしたことのやうに全く私には考へられた。

タヒチの天國、navé navé fénua——愉悅の國！

そしてこの天國のエヴは益々愛らしく、益々懷かしくなつていつた。私は彼女の香 noa noa！からすつかり浸されてしまつた。彼女は一番好い時に私の生活に現はれて來たのだ。早かつたら私は恐らく理解しなかつたらうし、遲かつたら餘りおそすぎたらう。今は私が

彼女を愛すると同じ程に、彼女を理解して居る。そして私は彼女を通じて、今まで自分には近寄れなかつた神秘のなかへ入りこんで行つた。

私の知能はまだこの發見を消化してなかつた。私は自分の腦裡にまだそれを刻みこんではなかつた。テフラの私に物語つたものは皆、私は唯感情で理解したにすぎなかつた。

私は自分の感じや印象のうちに彼女の言葉を他日また發見するだらう。ある外の方法でされるよりも、もつと確實に彼女の生活上の日々の仲立ちに依つて私がその種族を全く理解するやうに彼女は私を導いた。

そして私は最早日も時も、善も惡も、そんな意識は有たない。その幸福は時として、幸福といふ概念なんかは全くなくなつてしまう

ほど奇しきものであつた。すべては美であるが故に、すべては善であると、私は唯かういふことを知るばかりである。
そしてテフラは決して私の邪魔をしない、私が働くときにも、又夢を描くときにも、本能的に彼女はそのときはだまる。彼女は私をこまらせることなしに話の出來る時を能く知つ居る。
私達はタヒチのこと、歐羅巴のこと、又は神様、神樣達のことを語り合つた。私は彼女を教育し、彼女は私を教へた。
私は一日がゝりでパペエテに行かなければならなかつた。
夕方には歸る、と私はしつかり約束をした。然し私の乘つた馬車は道の途中で駄目になつた。私はその先を徒歩で行かなければならなかつた。それで家に歸つた時には、朝の一時になつた。
私は戸を開けて、家のなかの眞暗なのに胸を震るはせ乍ら、見た。

このことはそのことだけでは大して驚くほどのことではなかつたのだ。何故なら私達は其時には全く僅ばかりの燈火しか有たなかつたのだ。そしてその貯蓄を新らしくするといふのが、自分が留守にした一つの理由でもあつたのだから。然し私は突差に湧く恐怖と嫉妬との感情にふるひた。その感情を私は、鳥は確にとんで行つた、といふしらせだと思つた……

急いで私は燐寸をつけてそして見た——テフラは寝床の上に動かずに裸で、偏たくのびて居た。その眼は恐怖で並外れて大きく開いてた。彼女は私を見守つた。が私を見分けられないやうであつた。私自身は數秒間いひ知れぬ不安のなかに立つた。テフラの驚愕が貫ぬくやうに動いた。私にはそのじつとした、見つめた眼が燐光のながれるやうであつた。唯の一度も嘗て私はこんな美しい、こんなに

心を動かされた美しさを見たことがなかつた。そしてそのとき此の彼女にとつては確に不安な幻影にみち〳〵た薄暗がりのなかで、私は動くのを恐れた。動くことが彼女を畏怖させ、小供の發作を高めかねなかつたから。一體私は、この瞬間の私は彼女にとつて何であつたかといふことを知つたであらうか、彼女は私のおどろいた顔を惡鬼か、又は幽靈か、彼女の傳説によれば眠られない夜に現はれるといふテゥパパユスの一つと思つたのだらうか。彼女自身が本來何だらうかを私は知つたであらうか。彼女の迷信の現實的並に道德的の力で彼女を支配してゐる驚愕の强さは、彼女を私が今迄知つてたものとは全くちがつた、私には見知らない物精にしたのだ！

到當彼女は自分に返つて、私に呼びかけた。そこで私は彼女を叱り、なだめ、鎭めるやうに自分の勇氣を鼓舞した。

彼女は不機嫌に私の言葉をきいてたが、噓欲の爲めに聲をふるはしていつた

——もう私を燈火のないとこに一人でをいとかないやうに……然し嫉妬が目覺めると、恐怖は漸くおさまつた。

——貴方は町で何をしていらつしたの。貴方は女を、市場で踊つたり、のんだりする、そんな女を、役人や水夫や誰にでも身を任せるやうな女を訪ねたんだ……

私は喧嘩にはさせなかつた。その夜はさはやかな——さはやかで、熱い、熱帶の夜だつた。

テフラはある時ひざく愛らしなくり、又理性的になるかと思ふと、又直ぐに常規を逸し、ひどく激越して來る。二つの相對向した性質——他の多くの無限にことなつたものは數の中に入れずに——が一

つになる。それが双方の虛僞を責め、非常な速度で踵を接してお互に續いてゆく。彼女は變るといふのではなかつたのだ。そうでなくつて二重三重、百重なのだつた。老ひたる種族の小供であつた。

ある日旅商人、永遠の猶太人がやつて來た――彼はこんな絕海の孤島をも舊大陸と同じに不安にさす――鍍金をした銅製の化粧品の入つた箱を持つて來た。

彼はその品物を列べてた、皆は彼の周圍をとり捲いた。

一組の耳輪が手から手に渡つた。女達の眼はかゞやき、誰も誰もそれをほしがつた。

テフラは肩をうごかし、私の方を見た。彼女の眼は非常にはつきり物語つて居る。私は知らん振りをして居る。

彼女は私を隅の方へ引張はる。

――私あれがほしい。

――そんなものはフランスでは何の値打もないものだといふこと、それは銅なんだといふことを私は彼女に說き聞かした。

――私あれがほしい。

――だめ。そんな馬鹿なものに二十フラン拂うんだつて。馬鹿なことだ。いけない。

――私あれがほしい。

そして激越して來て舌を動かし、眼に涙を一杯にして私に迫つた

――どうしてまあ貴方はかういふ飾を他人の耳に見るのを恥としないんだらう? あすこに居る人は、ワヒナに耳輪を贈るために馬を賣らうといつてるのに!

私はこんな馬鹿なことをゆるしてはならない。それで二度彼女を

たしなめてやつた。
テフラは一言もいはずに、じつと私を見つめながら泣いた。
私は行つて、又戻つて來、到當猶太人に二十フランやつた――そうしたら太陽は又かゞやいた。
二日あとが日曜日だつた。テフラは大變なお化粧をした。髮は石鹸で洗つて、それから日光にかはかし、それからおしまいに匂のする油をすきこんだ。一番奇麗な着物をきて、私のハンケチを手に有ち、耳の後には花をつけ、それから――跣足でお寺に行く。
――それから例の耳輪は？と私は尋ねた。
テフラは蔑すむやうに口を歪めた。
――眞當に銅だつたわ！
そして大聲に笑つて小舍の閾をまたいで、俄に眞面目になつて出

て行く。

何時もの他の日と同じやうに並びあつて寢たり、夢を見たりして、午の休をすごした。恐らくテフラはその夢に他の耳輪のかゞやくのを見たらう。

一切のことを忘れて、何時も能くねむる……

＊

一日上天氣に——タヒチでは例外のない——私達は朝出だして友達を訪ねやうと決心をした。その友達の家といふのは私達の處からは十粁ばかり隔たつて居た。

私達は六時に出發したので、凉しいうちに道を急いだ、そしてもう八時には着いた。

私達の行つたのは全く思ひがけなかつたで、その喜びは大變だつた。そして挨拶がすむと彼等は私達の御馳走の支度に豚を探しに出かけて行つた。豚は屠られた、また豚の外に二羽の鷄が足された。朝摑みとつた美事な黑蝸牛とバナナが幾らかさそれに他の果物とで立派な御馳走が出來た。私は晝飯までの時間でマラの洞穴を見に行かうといふ相談を持ちかけた。その洞穴といふのはまだ一度も見に行く機會がなく、私は度々遠くから眺めてたのだ。

三人の若い娘、男の兒、それにテフラと私との元氣な僅かの連中は直ぐに目差す場處に着いた。

道端からは、殆と全部グァヴの木で蔽はれた此の洞穴は單純に岩の

出鼻が、それともいくらか深い裂目位にしか思はれない。然し枝を曲げ戻して、下の方へもう三尺も這入らうものなら、太陽はもう見えなくなり、その底は見たところ百米突もはなれてゐて、濃紅色の天井をした舞臺を想像するやうな一種の穴の中にゐる。壁のあちこちには、大きい蛇が內側の池の上水を呑まうとゐるがいとゐたくりついてるやうに思はれる。然しそれは岩の裂目をぬけつて道を開いてる襞なのだ。

——水を浴びやうよ、ね?。

水が餘り冷めたすぎるといふのが彼等の返事であつた。そしてそれとは無關心に永い話が笑聲で途切られてはまた續いた。それが私に好奇心を持たせるやうにする。

私は敗けはしない、到當娘達は輕い着物を脫がうと決心した。パ

レオを巻きつけるや、私達は直ぐにもう水の中に居た。

――Toë, toë!（おゝ冷めたい）と皆が一緒に叫んだ。

水がぱしや〱と音をたてる、そして皆の叫聲が數千の木精に射返される。それが toë toë を繰返へす。

――私と一緒に來ないか、と私はテフラにいつて奥の方を指した。

――まあ、あなたはどうかなすつたんぢやない？まあ、あんな奥の方、遠いわ！そして鰻が？そんな奥へ誰が行けるものですか。

そして彼女は巧く泳げるのが得意な人のやうに活潑に易々と岸にとびあがつた。然し私だつても泳ぎは巧者だ、一人でそんなに遠くへ行くのは氣持好くはなかつたけれども、私は奥の方へ進んで行つた。

何といふ不思議な空中反映の現象に依つてなのだらう、私は底へ

達しやうと骨を折れば折る程段々奥底は遠くなつて行く。私は段々先へ〳〵迫つて行つた。そして四方八方からは大きい蛇が私を輕蔑して見て居る。一瞬間私は大きい龜が泳いでるのを見るやうに思つた。その頭を水から突き出しながら。そして狐疑深く私の方を見詰めて居る二つの凝とした輝いた眼を見分けた。——馬鹿な！と私は考へた。海龜が淡水のなかに居るものか。それはそうとしても（私も眞當にマオリ人になつたのだらうか）私には疑惑だつた。からだの震ひが仲々やまない。一體私の前の幅の廣い靜かな波は何の波なんだ。鰻だつて！

——來い、來い！この恐怖から來るたびえに、感じを振ひ落してしまはなければならない。

私は水底に達するためにに水直にからだを下した。然し達すること

出來ずにまた浮びあがつた。岸ではテフラが私を呼んでる。
――歸つ來ててよ！
私はからだを轉ずる、彼女は非常に遠く、極く小さく見える。
何故距離が此處ではかうも無際限に行くのだらう。テフラは光輪中の一黑點にしかすぎない。
私は意固地にも聞き入れない、そしてなほ半時間泳いだ。奥底は何時も其の儘同じ距離にあるやうに見える。
小さい丘の上の動かない點と、それからまた口を開いてる穴と――それは何處へ通ずるのだ。秘密、その探險を私はあきらめる。
私は白狀するが、到當眞當に恐ろしくなつた。
私は目的を達するに一時間たつぷりかゝつた。
テフラだけが私を一人待つてた。彼女の連れは平氣の平左で行つ

てしまつた。

テフラは祈をあげた、そして私達は洞穴を去つた。

私はなほ暫く震ひてた——冷たさで。然し野原に出ると私はもう直ぐに、ことにテフラが少しも蔑すむところの見えない微笑をたたへて話しかけたときには、すつかり元氣になつた。

——恐くはなかつて？。

臆面もなく、私は答へた。

——俺達フランス人は恐いなんといふことは知らないんだ。

テフラは慰めもしなければ、賞めもしない。然し私は彼女が探ぐるやうに眦から流し眼に見てるのを、彼女の髪につけるために色のあるチアレを摘まうと二足三足先きに出たとき、氣づいた。

道は美しかつた、海は立派だつた。私の前にはモレアの堂々とし

た雄大な山が聳えたつて居る。

まあ何さいふ善き生活だらう。そしてどんなにがつ〳〵と、二時間の水浴の後で、家に待たれてた美味に料理された豚を喰べたことだらう。

*

マタイエアでは大變な婚禮——宣教師等が改宗したタヒチ人と記した處の、合法的で且つ宗教的な正當なる婚禮——があつた。

私はそれに招ねかれた、テフラは私を連れて行つた。

宴會がタヒチでば——何處でもそうだと思ふが——重なるお祝に

なるのだ。タヒチでは、少なくも、かういふお祝には非常に贅澤な料理が出る。熱い石の上で炙られた豚とか、魚、バナナ、グアヴ、タロ等の信じ得られないやうなざくとか、といふやうに。可成の澤山のお客が坐はる食卓は一時間に合せの屋根の下にあつた。その屋根は景氣好く花や葉を以て飾られてあつた。新婚夫婦の親類と友達とは皆席に列した。

若い娘――土地の女教師で、半白色種の女――は系統の正しいマオリ人、プナアウイア Punaauia の頭領の息子を夫にした。彼女はパペエテの『宗教學校』で教育された。彼女に興味を感じてた新教の僧正は多くの人からは急ぎすると思はれたこの婚姻を自から媒介をした。――宣教師の欲する處は神樣の意志である、といふことだ……

一時間たつぷり食つた、そして――多くは飲んだのだ。それから

澤山の演說が始まつた。それが型通りにされた。正しく滑稽な雄辯競爭會である。

次いで重大な問題が起る。是等の二つの家族の何方が新婚の夫婦に新しい名を與へるか。この非常に古い時代から傳はつて來た國民的慣習といふものは、非常に希望せられ、又非常に競爭せられた貴重なる大特權として考へられたのである。この點に關する爭が血醒い戰爭に變じたことも稀ではなかつた。

今度はそんなことにはなりやしない。萬事が愉快に、平和に運ぶ。無論食卓の連中は非常に醉つた。私の可愛らしいヴヒナさへ、私は始終彼女に目をつけて居ることは出來なかつたのだが、周圍の例につれて恐ろしく醉つてしまつた。そして連れて歸るにはずい分骨が折れた。

食卓の中央に賞讃に價するだけの威嚴を持してプナアウィアの頭領の妻が坐つた。そのオレンヂ色の天鵞絨のけば〳〵しい奇怪な着物は丁度歳の市の女といつた外見を與へた。然しこの人種の打ち破しがたい愛嬌、たとへば階級の自覺といふやうなことが彼女のぴかぴかな着物に筆舌に餘る偉大さを附けた。この全く純粹な型の威儀堂々とした女性が席に在るといふことが、このお祝に他のすべてにたち優つて強い刺戟を與へた。そしてその效果といふものは決してあらはれずにゐはなかつた。

妻と並んで百歳の嫗が坐つた。その老齡にもかゝはらず完全に保存されてる二列の食人齒には驚かされに。彼女は自分の周圍の出來事には殆ど頓着せず、全く木乃伊のやうに動かずに凝として居た。然しその頰の上の文字、ラテン文字を思はすやうな形の不定な黑い

記號は私の眼には彼女に代つて話をし、そして彼女の歷史を物語る。その文身は野蠻人のとは全く似てゐない。それは確に歐羅巴人の手になつたものだ。

私は自分に尋ねた。

嘗て私はかういふことをきいたことがある。宣教師等が性慾の罪業に對する嫉妬に燃えて、彼等は『ある女』に『地獄の表號』である醜行の極印を押した。——女はそれを愧ぢた、然し犯かされたところの罪の故にではなく、かういふ『記號』の馬鹿らしさと面目なさとからであつた。

其の時、私は、マオリ人の歐羅巴人に對して持つ不信任、オオストラリア人の心の寛大にして愛相のいゝ性質のなかに和げられては見えるが、今日でもなほ存してるところの不信任の由來を今までに

なく好く理解した。

僧侶に烙印された媼さ、僧侶から結婚させられた娘との間に何年かゞある。記號は消えずに殘り、そしてこの人種の自から投じたところの沒落や又この人種が彼女に强制したその墮落を證明して居る。

五ケ月後に若い妻は發育完全な小供を產んだ。

怒つて兩親は離婚を請求した。若い夫は反對した。

——私達はお互に愛してるのに何をなさる、と彼はいつた。他人の子供を引取ることは私達の風習ではないですか。私は小供を引取ります。

何故僧正は結婚を急がすのにあんなに骨折つたのだらうか。いろいろなことがいはれた。毒舌は主張した、こんなことを……

タヒチにすらも毒舌はある。

夕に寢床の上で私達はお互に眞面目に永いお喋舌をする。
彼女の心臟の中には祖先の精神がいまだなほ眠つて夢見て居るテフラを理解することの出來る今、私はこの小供の心を通して自分を見、自分を考へ、そしてこの心のうちに實はとうに死んでしまつたのではあるが、なほ莫とした記憶のうちに存して居る遠い過去の痕跡を發見しやうと努める。
私は問をだす、そしてそれは皆答へられた。
歐羅巴人の征服から混亂され、その文明から強く影響された男達は恐らく古い神樣を忘れてしまつたのだ。神樣は女達の記憶のうちに隱家を有つてゐた。私の影響で古い國民的の神々が徐々にテフラ

の記憶のうちに目を覺まして、新敎の宣敎師等がそのなかに封じこんでしまつたと信じてる人工的な被覆を除き去る時に、彼女が與へる處のものは私にはたまらないものだ。元來カテヒストの仕事といふものは實に皮相的なものだ。彼等の勞作の結果は、ことに女性の間にあつては、彼等の豫期に報ゆるところは全く缺けてゐた。彼等の敎は、ほんの觸れたゞけでも直ぐ樣碎けて消えてしまう脆い假漆のやうなものだ。

テフラは規律正しく神樣のお勤をなし、國敎の條文を遵奉する。然し彼女はマオリのオリンプスの神樣の名を皆暗誦して居る。このことは決して小さいことではない。彼女は神樣の物語を知つてゝ、神々がどうして世界を作り、どう世界を支配し、どう尊敬されることを望んでるか、といふやうなことを敎へる。基督敎道德の嚴格な

る教は彼女には他國のものである、またそれ故に苦しめられもしない。たとへば或る男の妾――そう呼ばれるやうに――であるといふことを何も後悔しやうとは思はない。

彼女がキリストとタアロア Taaroa とを自分の信仰のなかでどう列べてをくのかは、好くは私は知らない。彼女はすべて兩者を崇めてると私は信ずる。

次から次と彼女は私にタヒチの宗教に就ての全部の講習をしてしまつた。その代り私は歐羅巴人の智識に基いて二三の自然現象を說明しやうとやつてみた。

彼女は非常に星に興味を有つてた。彼女は私に曉の明星、宵の明星、それから他の星のフランス語の呼び方を尋ぬる。地球が太陽の周圍を廻轉する……それを納得することは彼女には困難であつた。

彼女は私に土語で星を名指す、そして彼女が話してる間、私にはそれ自身が神である星の光彩の中にマオリの空氣、火炎、島嶼、海洋の支配者なる聖像が目前にはつきりと見える。

タヒチの土人は彼等の傳說の中に頭を向けてる間は何時も可成り突きこんだ天文學の智識を有つてゐる。

アレオイス Areoïs ——この島を支配して居る宗教的で同時に政治的の秘密結社の仲間——の定期のお祭は星の位置に依つてきめられる。

月光の性質でさへもマオリ人には決して解らないことではなかつたやうに思はれる。彼等は、月は地球に非常に似た球で、地球のやうに產物に富んで居る、と考へた。

月と地球の距離は彼等は彼等一流に測つて居る。——白い鳩がオラ Ora の木の種子を月から地球に有つて來た。鳩は衞星に達するに

二月かゝつた。そして鳩がまた二月後に地球に降りたときには、鳩は翼がなかつた。――この鳥はマオリ人に知られてる鳥の中で一番速いものだ。

かういふのがタヒチの星の名前なのだ。私はテフラの講義をポリネシアで發見された古記錄の斷片の助を借りて完成した。想像の偶然な遊戯としてよりも寧ろ天文學上から列べられた系統の最初の解說として見ることがゆるされないだらうか。

ロウア Roüa ――その本原は大きい――はその妻、悲痛の地球とねた。

彼女は地球の王なる、太陽、次に黄昏、それから夜を產んだ。

そこでロウアはこの妻を逐ひだした。

ロウア――その本原は大きい――"Grande Réunion"と呼ばれた女とねた。
彼女は天の女王なる諸星、それから星タヒチ、宵の明星を産んだ。
唯一の王、金色の天の王はその妻ファノウイ Fanoüi とねた。彼女から星タウロウア Taüroüa（ヹヌス）と、曉の明星と、晝と他の諸星、月と太陽に命令し案内者として航海者に役立つてる王タウロウアが生まれた。
タウロウアは左北方に航した、そこでその妻とねて、赤い星を、宵に二つの顔の下に輝くかの星を産んだ。
赤い星は東方にのがれて、自分のピローデ、輝く日のピローデを用意した。そして天に航した。日の出に際して其處から

漕ぎだした。

レホウア Rehoüa は今廣大な空間に登る。彼はその妻、オウラ・タネイバ Oüra Tanéïpa とゐる。

彼等は雙生兒の王なるプレアデスを產む。

この雙生兒の王は確にカストルとポラクスと同一だ。ポリネシア創世記の最初のものは變化をうけた、その變化は恐らく唯進化なのだ。

タアロア Taaroa は外界（若しくは海の）の女神と自分を呼ぶ女とゐた。

彼女は白い雲、黑い雲、雨を產んだ。

タアロアは內部（若しくは陸の）の女神と自分を呼ぶ女とねた。
彼等から最初の萠芽が生まれる。地球の表面に生ずるすべて
のものが生まれる。
山の上の霧が生まれる。
自分を强者と呼ぶものが生まれる。
自分を美と呼ぶもの、若しくは氣持好く着飾つたものが生れ
る。
マホウイ Mahouii は自分のビローヂを漕ぐ。
註――このマホウイは諸星を作つたロウアと同じらしい、又タアロアとも同一らしい。
恐らく同じ神のちがつた名なのだらう。
彼は地面の上に坐はる。彼の右側に頭髮を捩つた紐で蔴繩に
結び附けられた釣針がひつかゝつた。

そこで彼は手にとつた釣針の着いた麻縄を釣針ごと宇宙のごん底に、大きな魚(地球)を釣るために放り投げた。

釣針はしつかり咬みついてた。

斧が見えて來た、神はすでに地球の非常な重味を感ずる。テファトウ(地球の神で、地球自身)はなほ無際限の空間のうちを搖られながら、釣針にひつかゝつて、夜から高くあがる。

マホウイは空間に搖れてゐ、そしてそれを彼の思ひのまゝに動かすことの出來る大きい魚を釣つた。

彼はそれを手にとる。

マホウイは晝と夜とが同じ長さであるやうに太陽の軌道をきめる。

私はテフラに神々のことを話すやうにたのんだ。

――タアロアは空氣の女神、オヒナ Ohina とねた。
彼等から虹、日光、赤い雲、赤い雨が生れた。
タアロアは地底の女神、オヒナとねた。
彼等はテファトウ、靈魂を産んだ。それは地球を生かし、地下の騷擾に依つて自分を認めさせて居るのだ。タアロアは地球の彼岸と呼ばれる女とねた。
彼等は神のテイリイ Téirii ロウア、ノウア Roüa Noüa を產んだ。
その次にはロオ Roo, これは別に母親のからだから出て來た。
そしてこの女がなほ憤怒と、暴風と、狂風と、是等につゞく平和をも產んだ。

そして是等の靈魂の根源は、そこから使者達が送られた其の場處の中にある。

然しテフラは是等の叙述は議論の餘地があることを承認してゐる――これはオルソドックスの分類なのである。

神々はアテゥアス Atuas とオロマテゥアス Omiroatuas とに區別される。高き地位のアテゥアスは皆タアロアの子や孫である。彼等は天に住んでる――それに七つの天がある。

タアロアとその妻フェイイ・フェイイ・マイテライ Féii Féii Maïtéraï の子といふのが、かうだ。オロ Oro（彼の父に次いで神々の中での第一人者であり、二人の子テタイ・マチ Tetaï Mati とオウロウ・テフェタ Oüroü Téféta を有つてる）、ラア Raa（七人の子の父）、タネ Tané（六人の子の父）

ロオ Roo, チエリ Téri テファトウロウア、ノウアトマ、ホラ Toma Hora, ロウア・オウチア Roüa Oütia, モエ Moë トウパ Toüpa, パノウア Panoüa 等…
……………

是等の神々は各自に特別の屬性を有つてゐる。マホウイとテファトウとの仕事は私達はすでに知つてる……タネは第七番目の天を口として有つ——そしてこのことは此の神の口——そこから光が地球を照し始めるのだが、其處が天の一番の外の端だといふことを意味するのだ。

リイ Rii は天と地とを分ける。ロウイは大洋の水を湧きかへらせ、地球の堅い塊を破つて、無數の部分、今日の島に分けた。

その頭は雲に、その足は海底に達してるファノウラ Fanoüra と、そ

れからも一人の巨神ファトウホウイ Fatouhoüi とが共にエイヴ Eïva ——未知の國——の方へ下つた。人間を呑み殺す巨大な豚と戰ひ、それを亡ぼす爲めに。

盜みの神、ヒロ Hiro は彼の指で岩に穴を掘つた。彼は食人鬼が伏魔殿中に虜にしておいた若い女を自由にしてやつた。彼は唯一本の手で終日若い女の牢獄を覆ひ隱してた大樹木を伐り倒した、そして魔法は打ち碎れた……

低い階級のアテゥアスは神としての特性を分け有たずに寧ろ人間の生活や勞働の爲めに骨折つた。

それはかうだ。アテゥアスのマホ Maho（神の鮫）は船乘りの守護神であり、谿谷の男女の神、ペホ Pëho は農夫の守護神であり、ノ・テ・オウパス・オウパス No Te Oüpas Oüpas は歌唄ひ、道化役者、踊子の守

護神であり、ラアオウ・パヴ・マイス Raaoü Pava Maïs は醫者の守護神であり、ノ・アパス No Apas は供物を捧げるものを妖術や魔法から助ける神であり、オ・タノウ O Tanoü は勞働者の守護神であり、タネ・イテ・ハアス Taré Ité Haas は大工、建築家の守護神であり、ミニアス Minias とパペアス Papeas は屋根屋の守護神であり、マタチニス Matatinis は網工の守護神である。

オロマテゥアスは家を護る神、ラレンである。

實際のオロマテゥアスと他に守護神とがある。

オロマテゥアスといふのは喧嘩好きを罰し、家庭のうちに平和を確立する。それはかうだ。ヴルナ・タアタス Varua Taatas は家々の死んだ男女の心靈であり、エリオリオス Erioriosは早世した小供の心靈であり、ポウアラス Poüaras は生れるとき死に、そして蟋蟀の體に

歸つて行つた小供の心靈である。
守護神といふのは人間から假想され、むしろ意識的に考へられた神である。ある動物なり、物なりに、たとへばある樹木に勝手に理由はなく神らしい意味を附け添へ、何か大事の場合にはそれに相談をするのだ。――これは恐らくマオリ人が恐らく知つてたらしい印度の輪廻說の痕跡の今に存するものだらう。

彼等の歷史的の歌は、神がまた動物や植物の姿になることが見られる傳說に富んで居る。

アテゥアスとオロマテゥアスとに次いで天上階級の最後の列次にチイス Tiis が來る。

タアロアとヒナの子が非常に澤山あつた。

彼等は神の下に位し、人間には遠い魂魄として、マオリの傳說に

依れば、生物と無生物との間に介在し、生物の無法なる攻撃に對して無生物の要求と權利とを防禦する。

彼等の起原はかうだ。

タアロアがアニ Ani（憧憬）とねた。そして彼等が產んだのが、暗と死との使者なる夜の憧憬、光と生との使者なる晝の憧憬、天國の使者なる神の憧憬、地極の使者なる人間の憧憬であつた。

次に產んだのが、動物と植物とを見張つてる內界のチイ、外界のあらゆるものを守る外界のチイ、砂地のチイ、海濱のチイ、瘠地のチイ、岩石のチイ、大陸のチイとであつた。

その後になほ生れたのが、夜の生活、晝の生活、來往、干滿、愛好賞玩であつた。

チイの像はマラエ Maraé（寺）の外部に貼られて、神聖なる地面の

内側を仕切る。岩の上にも、海のほとりにもそれが見られる。此の偶像は陸と海の間に境を劃し、二つの要素の間に調和を確立し、相互の侵略を防ぐ任務を有つて居る。旅人は今もなほイレ・デ・パク Ile-de-Paque の上にチイの像を見るのである。それは半人半獸の姿の大きい石碑であつて、石の取扱ひ方に固有の美的觀念と非常な技術とを示し、巧に色彩の配合を選擇した石碑が建築的に重なり〱積まれてある。

歐羅巴人の侵略と唯一神敎とが彼自身の文明の痕跡を拭ひ去つた。タヒチの人は今日石碑をたてるときには驚く可き下等の趣味をあらはす——丁度ポマーレの墓碑のやうに。彼等は本來の本能を失つてしまつた。それはたえず動植物界と接觸して彼等の間に多分に發達したものであつたのだ。吾々歐羅巴人との交通や歐羅巴人の學校で彼

等は、初めて眞當のラテン西方人が用ゐた意味での「野蠻」になつた。彼等は藝術品のやうに美しくはなつてる、然し彼等は道德的に、そして又物質的にも貧弱になり（吾々はそうさした）。

マラエの跡はなほ存して居る。それは三つの開きで中斷された塀で圍まれた四邊形のものであつた。三方に四呎乃至六呎の石塀からなり、幅よりは稍低いピラミドが四番目になる。全體が幅約百米突長四十米突である。――チイの像がこの單純な建物を飾つて居る。

月はマオリの哲學思想のうちで重要な地位を占める。月を崇めるために以前には大變なお祭が行はれたことはすでに云はれてある。ヒナは傳說の物語のなかではしばしばアレオイスと呼ばれる。けれどもその世界調和に對する協力は積極的であるよりはむしろ消極的の役を演じた。

このことは前に記したヒナとテファトゥの話から明かである。

斯樣な說話は、若しオオストラリアの經文が發見さるゝならば、それを說明するために註釋者に立派な材料を供給するだらう。先づ第一に彼はその中に自然力崇拜――すべての原始宗敎の共通的性質――に宗敎の敎理のあるのを見るだらう。すべてのマオリの神の複數は種々の要素の擬人化である。彼等の民族性よりも吾々歐羅巴人の哲學の優逸なることを證明しやうといふ希望に妨げられたり、影響されたりしない注意深い眼識はこれらの物語のうちに確に興味があり、又本質的な特徵を發見するだらう。私はそこから二つの特徵を引き出せる――然し私はそれを指示するだけで滿足するのだ。この假定の正當なることを確むるのは學者の仕事である。

先づ第一に明快に人生の唯一的なるものと、一般的なるものとの

二つの根本思想を區別し、表はしてることである。一方、心靈、知能、タアロアは男性であり、他方同じ神のいはゞ素材、體軀は女性である、そしてこれはヒナである。人間のあらゆる愛情はヒナに、尊敬はタアロアに屬する。ヒナは月の名であるばかりでなく、空のヒナ、海のヒナ、陸のヒナである、然しこの二つの文字、即ち海と陸とは唯物質の下級の部分を指示するものである。太陽、天、光、及び其の領分、いはゞ物質のすべての高尚な部分——むしろその精神的要素といふべきはタアロアである。このことは靈魂と物質との定義がそのなかからまた認められる多くの諺から明かになる——若し吾々がこの定義に從ふならば、

『宇宙はタアロアの皿にすぎない』

といふマオリの創造說の根本敎義は恐らく何を意味するのだらう

か。

この教義は、靈魂と肉體との限界及び分離が彼等の統體に於ける材料の二つの表象の分析であるといふところの材料の統體に對する信仰を確證しないだらうか。かやうな哲學的の直覺といふことは原始人種にあつては稀ではあらうけれども、然しその可然性は動かすことは出來まい。オオストラリアの神學は世界を作り、これを維持してる神の行爲のうちに二つの目的を見て居るといふことが認められる。卽ち物を産んで行く原因と實のらせられる物質、物を動かす力と支配せられる對象、靈魂と物質である。吾々は物を照らす靈魂と靈魂に生かされ、受け入れる物質との間の不斷の交互作用のうちに、タアロアがいろ〳〵の姿をしたヒナとの相次ぐ結合のうちに太陽の永續し、交代する影響を丁度これらの結合の結果に於けると同

様に、これらの要素に依つて呼びおこされた光と熱との變化を認めなければならない。吾々はこの大本流が一所になるこの現象を目前に見る。その果實のなかには產み出す原因と實らのせられる物質とが、その運動のなかには物を動かす力と支配せられる對象とが、生命のなかには靈魂と物質とが融合する。そしてかく作られた宇宙はタアロアの皿にすぎないのである。

ヒナとテファトゥとの話から、月と月に住んでるものとは永存するのに、人間と地球とは沈むといふことが出てくる。ヒナは物質を表象する――物質に於ては科學的のいひ方に從へば『すべてのものは變化する、然し何物も消滅しない』――といふことを考へたならば、傳說が生み出された昔のマオリの賢人は吾々のやうにかういふ知識を有つてたといふことを吾々は假定しなければならないだらう。物

質は消滅しない、卽ち物質は感覺的に知覺せられる特性を失はない。これに反して靈魂、「精神的物質」卽ち光は變化を抑束する。そこから光線が流れるやうに見えるところの眼を閉ずると、其處に夜と死とがある。それらは光線を投げ返へす——靈魂、若しくは靈魂の最高の動的表象は人間である、そして人間は死なければならない……彼は死ぬる、最早生命に甦めないために。——たとへ人間と地球、ヒナとタアロアとの結合の果實が沈んでも、然しタアロアは永遠である。そしてヒナ、物質は何時までも曳かれて行くものであるといふことを吾々に告げ知らす。靈魂と物質、光と其の光が照らさうと努めてる對象とは、久遠の永劫に於て二者の新なる結合への願望が滿たされるであらう、其處からは生命の無限の進化の新しい狀態が生れいづる。

進化！……材料の統一……昔の食人種の考のうちにかういふ高文明の證跡を發見しやうとは誰が思ひ設けたらうか。私は眞實に何物をも附け足さなかつたといふことを良心に誓つていふことが出來る。テフラはこれらの抽象論理に關しては全く疑はなかつた。

然し彷徨してるテゥパパユスと泣き悲しんでる惡鬼とを、星の流れのうちに見ることを彼女はやめなかつた。彼女の祖先がタアロアを天そのもの、彼から出たアテゥアスを同時に神及び天空と思つたと同じ意味で彼女は人間の感覺を星の故として居る。如何なる範圍に於て詩的思想が實證科學の進歩を妨ぐるものか。又如何なる點まで最高科學が詩的思想を排斥するものだらうか私は知らない……

他の見方からすればヒナとテファトゥとの話に對していろいろの意味がゆるされる。女性である月の忠告は盲目なる同情とセンチメン

タルな無氣力の危險なる忠告であつたであらう。月と女とは（マオリ人の思想では）物質と同意義を有ち、死は生命の秘密を葬むるといふことを彼等は知る必要がなかつたのだ。――テファトゥの返事は最高智識の嚴格なる、然し先見ある、無私の宣言であつたであらう。最高智識は能動生活の個人的表現は來るべき高級なるものに地を變ひ、勝たれるものに供へらるべきであるといふことを認める。

昔はこの解答は一層効力の大なる國民的豫言の意味を有したものであつたらう。大賢人が古代に於て民族の生活能力を研究し、評價して、彼等の血液のうちに存する快癒の力のない死の萠芽を先見し、かういつたのであつたらう。

タヒチは死にたえるだらう、それは死にたえるだらう。再び生き返へらないために。

ラフラはある宗教的の恐懼を抱きながら、アレオイスの統治時代にこの島を支配してたかの宗派、卽ちアレオイスの秘密結社のことを話した。

小供の錯雜した話の中から私は恐ろしい、特殊の慣習に對する記憶を取捨した。私は前代未聞の罪過にみちみちた悲劇的の過去を想像した。それは好事家の穿鑿には嚴重に守られた秘密に依つて防がれてたのであつた。

テフラがその知つてるところを皆話してしまつたのち、私はなほ

隅み〳〵まで探索した。

かの強大なる結社の傳說的起原はかうだ……

タアロアの子で、父に次いで神々のうちで最高者なるオロは、ある日人間の間に妻を求めやうと決心した。

すべての中より選ばれ、すべてに立ち優つた種族を人間の間に彼と協力して打ちたてる爲めには美しい、有能な若い女でなければならない筈だ。

彼は七つの天を步き拔いた。そして女神テオウリ Teouri とオアオア Caaoa といふ彼の姉妹達の住んで居るボラボラ Bora Bora の島の高い山、パイア Païa に降りた。

そこでオロは若い武士の姿になり、自分の姉妹達を若い女に變らし、神々の接吻に價するやうなものを其處で探し出さうと島中を旅

した。

オロは虹を利用した。その一の端をパイアの頂にたて、他の端を陸にたて、男女の神々は谷や潮の上を歩つた。

人間達が彼等を迎へやうと急いでるところの彼所此所の島々で、この旅人達はすべての女が押し寄せて來るやうな華かな、驚かすやうな宴會を催した。

そしてオロは彼等の中を見廻した。彼の心臓は惱まされた。何故ならば彼は愛人を見出した、然し彼は愛さなかつたからだ。人間の娘達には誰の上にも彼の眼は永くはとゞまらなかつた。何故ならば彼は自分の夢見てた德行も長所も發見しなかつたからである。

無駄に探し廻つて、多くの日が經つた後で、ボラボラ島のヴイタペ Vaïtapé で、アヴイ・アイア Avaï Aia の小さい湖水に浴してる稀れに

見る美しい若い女を打ち見たとき彼は天に歸らうと決心した。彼女は丈が高かつた。そして太陽の熱がその美事の肉な上をやき、照してた。然し愛戀の全き魅力は、その頭髮の夜のうちにねむつてた。

恍惚としてオロは姉妹達に若い女を說得することをたのんだ。姉妹達派遣の結果を、パイアの頂で暫く待たうと彼自身は引返へした。

女神達は挨拶をして若い女に話しかけ、そしてその美を讃め、彼等がボラボラの一ケ所、アヴナウ Avanaü から來たことを話した。

——私達の兄が、あなたが兄の妻になることを御承知下さるかどうか伺ひたいんですつて。

ヴイラウマチ Vaïraümati ——若い女の名はかうだ——は探ぐるや

うにこの見馴れない人達を見つめて、そして答へた。

――あなた方はアヴナウからいらつしたのではない。然しあなた方のお兄様は頭領であり、又お若く、そしてお美しい。いらつしやると好う御座いますわ。ヴィラウマチは妻になるでせう。

テオウリとオアアオアは、彼が待たれてることを知らすために即刻パイアに登つて行つた。

直ぐにオロは前のやうに虹に乘つてヴィタペにおりた。

ヴィラウマチは彼を迎へるのに美事な果物を以て滿された食卓と奇麗な敷物と珍奇な織物とで以て部屋を用意した。

彼等の怡樂と力とに神々しさを持して、彼等は森や野に、海のほとりに、タマリスやパンダヌスの葉蔭に愛戀に耽つた。每朝オロはパイアの頂きにのぼり、每夜彼は女とねるためにおりてくる。

他の人間の娘達は誰一人この世の姿をした彼を打ち見ることは出來なかつた。

常にパイアとヴイタペとの間に懸られた虹が彼の道の役をした。荒れさびた七つの空にオロ逗留の報が消えた後、月は幾度輝いては又消えた。それでタアロアの二人の息子、オロテファとオウレテファとは人間の姿になつて彼等の兄を探さうと出發した。永い間彼等は彼を見出せずに島々を方々うろついた。けれど到當彼等はボラボラでヴイラウマチと、聖マンゴ樹の葉蔭に憩つてる若い神を見出した。

彼等は若い女の美しさに全く驚いたのであつた。そして驚嘆の標として贈物を捧げやうと思つた。オロテファは豚に、オウレテファは赤い羽翼に變つた。それから豚と羽翼とを無くなさずに再び人間の姿になつた。そして彼等は贈物を有つて戀してる人達に近寄つた。

オロとヴイラウマチとはこの立派な二人の旅人をよろこんで迎へた。

その夜に豚は七つの仔を産んだ。そのうちで第一のは後々の用のために保存せられた。第二のは神々達に供へられた。第三のは客のもてなしに供へられ、この未知の人達に供へられた。第四のは愛戀の光榮のための犧牲の豚と呼ばれた。第五と第六のは種族を殖やすために最初の生母になるまで保存された。最後に第七のはまゝのまま熱い石の上で炙のれた――マオリの習慣に依れば淨められたのだ――そして喰はれた。

オロの弟達は再び天に歸つた。

その後二三週間たつてヴイラウマチはオロに妊娠したことを告げた。

そのときオロは保育されてあつた七つの豚の第一のをとつてライアテア Raïatea の方へ、神ヴポア Va¦oa の御堂なる大きいマラエの方に行つた。

其處で彼はマヒ Mahi と呼ぶ男に會つた。その男に彼は豚をくれて、いつた。

——Maïi maitaï o e ténéi boüaa (この豚をとつて、その世話をやいてくれ)

そして嚴に神は言葉をつゞけた。これは神聖な豚だ、その血のなかには私から出た人間の血統の彩られてある。一體私はこの世界に於ける父である。彼等は自分をアレオイスと呼ぶだらう。私はお前にアレオイスの權利と名前とをやらう。私自身は最早此處には永くはとゞまることは出來ないのだ。

マヒはライアテアの頭領を訪ねた。そして彼にあつた事を語つた。頭領の友達にならずには、彼の自分に委任された神聖な寶を守ることは出來なかつたのだ。彼はいひ足した、——私の名はあなたの名、あなたのは私の名である。

頭領は滿足した。彼等は二人してタラマニニ Taramanini といふ名をつけた。

そのうちにオロは再びヴイラウウマチの許に歸つた。そして彼が彼女に Hoa Tadou te Rai (天の神聖なる友) と呼べとを命じた小供を彼女は產むだらうと彼女に告げた。

それから彼はいつた。

——時は滿ちた、私はお前を置去りにしなければならない。

彼はそれから大きい火の柱に變つた、そしてボラボラの最高峯、

ペリレレ Perirere の上まで、空に高くたちあがつた。そして其處から彼は泣き沈んでる妻と驚き恐れてる人民との眼から消えた。

ホア・タポウ・テ・ライは偉い頭領になつた、そして人間に多くの善事をなした。彼の死んだときには彼は天にあげられた。其處にはヴィラウマチ自身も女神の地位を占めて居た。

＊

オロはこの島に——何時かは解らないが、婆羅門の教を有つて來た、正しく諸國を遍歷する婆羅門の僧侶であつたといふことが出來るだらう（オーストラリアの宗教のうちにこの痕跡を私はすでに指

示して居る)。

この純粋無垢の混り氣のない教義のうちにマオリの天才は目を覺した。理解することの出來た聖者はお互に認めて、一致した——勿論完全に人民とは別に——規定された掟を行はんために。彼等の種族のうちで他のものよりは多く啓蒙せられて、彼等は忽ち島の宗教並に政治上の權力をうばつて、重大な特權をかため、多島海の歴史のうちに黄金時代を作つた强大なる優越權の基を置いた。

彼等は書くことは知らなかつたやうに見へるが、アレオイスは眞當の學者であつた。彼等は『神樣の諺』を言葉一つ一つを非常に苦心をかけて綿密に穿鑿して幾晩も夜を徹した。それ等を說明することは年餘の勞苦を要した。高々好く行つて註釋を附けられる位の彼等だけにしか解らない神樣の諺がアレオイスに精神的中心の基礎を

作り、熟慮といふ習慣をつけ、超人的使命を彼等に賦し、その前には誰をも屈せしめた威嚴を與へた。

これと全く等しい組織が歐羅巴のキリスト教並に封建制度の中世にある。そして私はかの宗教並に戰鬪團體、かの宗教會議よりもなほ恐ろしいものを知らない。それは神の名に於て判決を下だし、生死に關して絕對に振舞つたのである。

アレオイスは人身御供を神は滿足せられるといふことを敎ひ、そして自からも自分の子を長子を除いて他は皆マラエに供へた。この腥い掟のシンボルは神聖な豚である。第一の他は皆殺されたといふ七つの豚の傳說であつた。

然し吾々はこの蠻行に就いて輕卒に批難することはゆるされない。多くの原始的國民に任された恐ろしい義務といふものは社會的風

習並に一般的利益の上に深い根據を有つて居た。

マォリの種族がかつてそうであつたやうに、非常に繁殖力の强い種族にあつては無限なる人口增加は國民的並に積極的生存を脅かす。島の生活は實に骨の折れない、そして必要なものを作るには大した勤勞を要さなかつた。粗末なピローチではとても近寄れない、無際限の大洋に圍まれ甚だしく制限せられて居る範圍は、斷えず增加して行く人民にとつては忽ち缺乏勝ちになるのであつた。海は魚類を充分に、森は果物を充分に最早供給しなくなつた。飢饉は近づいて來た、昔は何時もそうであつたやうに、その結果は人を喰ふといふことになつた。――大人を殺すことを避けるためにマォリ人は小供の犧牲に限つた。外ではアレオイスが現はれたときには、人を喰ふことはすでに行はれてゐた。アレオイスは飢饉と戰ひ、その原因を

除くために小兒殺戮を行つた。この小兒殺戮といふことは、この主張の不淨なる喜劇が、道化芝居作者のお娯みに役にたつものならば、恐らくは風俗の敎化として示されるべきものだらう。アレオイスはこの繁殖をたちきらんがために恐らく多大の力を用ひなければならなかつたのだ、そして彼等は人民の眼の中に自分等に神の絕對的權威を附けさしたことに依つて達した。

到當小兒殺戮は種族の爲めの生存淘汰の有力なる手段となつた。初産といふ驚く可き權利、生命そのものゝ上にある權利が人民の力を滅せずに存した。即ち甘味を皆吸ひつくしてしまうといふ有害な結果を免がれた。このことはすべてこれ等の小供の內に打ちこはすことの出來ない自負の意識を養つた。この自負の原力と最後の血とは吾々がこの絕滅に迫つてる大種族の最後の萠芽のうちに今日なほ

感嘆するところのものである。

死の不斷の例證と頻繁なる交通とは遂に崇高な慰安の教であつた。武士は苦痛を輕んずることを知つてた、そして全國民は苦痛に際して强い辞福的感情を發見する。この感激は熱帶地方のだらけと不斷の仕樣事のない無神經な倦怠を防いだ。マオリの衰運はこの犧牲を法律的に禁止するとともに始つたといふこと、次に彼等は其の時から道德的の力と肉體上の生產力とを失つたといふことゝは歷史的事實である。若しこのことがこれらの原因でないとしても、それに思ひあたるところのある。

恐らくアレオイスは犧牲といふことの深い意味とそのシンボリカルな必要とを知つてたのだ……賣淫は彼等には神聖な義務であつたのである。吾々の間ではそれとはことなつてる。吾々歐羅巴人が文

明といふ善行を無暗に運びこんだ後にもタヒチでは賣淫は決してやまなかつた。賣淫は益々榮えた。然しそれは義務でもなく、神聖にもならない、唯何等の尊嚴もなく、ゆるすべからざることである。宗敎上の地位は父から子につたはる。その開始はすでに子供の時に始まる。

結社は元來十二の組に分たれてゐた。その首長は十二人の上流のアレオイスであつた。次に第二級の地位を有するものが來、そして最後に弟子が來た。この種々の階級は腕、兩脇、肩、脚、踝の特殊の文身に依つて區別される。

＊

アレオイスのマタムア、古代の國王即位式のマオリの光景はかうだ。

新統治者は、華麗な着物を着て、島の貴族にとりまかれて彼の宮殿を去る。彼の前を頭髮に珍奇な羽毛をつけたアレオイスの首長等が歩るく。

彼はお供を隨伴してマラエに行く。

彼を閾の處で待つてる僧侶達は、彼が見えると大聲に嗽叺の響と太鼓の音とで、儀式の始まることを知らす。

それから王と一緒に堂のなかに入ると、彼等は人身御供、死骸を神の像の前に供へる。

王は僧侶と一緒に祈禱をあげ、歌ふ。その後で僧侶が人身御供の

二つの眼を捌ぎとる。僧侶は右の眼を神に、左の眼を王に捧げる。王はこの血だらけの眼を恰も喰べるやうに口を開く。然し僧侶はそれを取り戻して、再びもとの體に納める。

註――この掟のシンボリカルな意味、人肉を食うことを明に禁ずることの誤解されないやうに。

それから神の像が、僧侶達が擔ぐ彫刻をした擔ひ臺の上にをかれる。二人の上役の僧侶に擔がれて王は神の像につゞく、丁度旅立ででもあるやうにアレオイスからお供をされて海の岸まで行く。途中僧侶達は嗽叺を吹き、大鼓をならしつゞける。

群集は謹み深く、靜にあとからやつて來る。

入江のほとりには、このお祭のために綠の枝や花を以て飾られた神聖なピローチが動いて居る。先づ初めに偶像が、そのなかに降ろされる。次に王は着物を脱ぐ、そして僧侶達は王を海の中につれて

行く。其處でアテゥアス・マオ Atuas Mao が彼を潮で洗ひ、彼を愛撫する。

かうして王は、最初お堂の中でされたと同樣に、二度目に神の現前で海の接吻に依つて淨められる。そして王は神聖なピローヂにのぼる。其處で上役の僧侶がマロ・オウロウで彼の帶をし、彼の頭のまはりには統治の紐タオウ・マタを卷く。

前方の小舟に立つて、王は人民にあらはれる。

それを見ると人民は到當永い間の沈默を破つて、到る處に祝ひの叫がひゞく。

—— Maëva Arii !(國王陛下萬歲)

最初の大歡呼の終つた後で王は聖臺の上にねかせられる、其處には矢張り偶像が置かれてある。そしてすべての人は前と殆と同じ樣

な順序で同じ道をマラエの方に行く、
再び僧侶達は偶像を、上役の僧侶達は王を擔いで、行列はまた音樂と踊とで始められる。
人民は後からつゞく。然し今は彼等は歡喜に醉ふて始終叫ぶ
――Maëva Arii!
偶像は恭しく祭壇に安置される。
それで以て宗教上の祭はおはる。そして人民のお祝が始まる。
お堂では神に、海では天然にされたやうに、王は人民に淨められる。――敷物の上にねかされて王は今や國民の最高の誓忠を迎へなければならない。
野生の國民の狂ほしい誓忠。
一人の人間に對して愛を表現する群集の全部。この人間は王であ

る。群集とこの一人の人間との間に於ける芝居は怖ろしいまでに、驚くまでに大袈裟である。明日は彼は君主である。彼は處分すべき筈の運命を意のまゝに處理する。そして未來は全部彼のものである。唯この時間だけが群集のものである。

全く裸體で、淫亂なる踊をなして男女達は王をとりまく、そして王の體の或る處と彼等の或る處とが觸れるやうに一生懸命になる。接觸といふことはその際常にさけられない。そして國民の狂奔が馬鹿の限りをつくし、平和なる島全體が恐ろしい叫を以て反響される。そして段々にやつて來る黃昏が物につかれた狂氣の群集の夢幻の姿を見せる。

然し急に嗽叺と太鼓の響がする。

誓忠は終に、お祭りは終りになる。歸りの合圖がひゞく。非常に

狂奔してた人達も鎭まる、すべてが靜になる、そして終に絶對的靜肅がやつて來る、

王はたちあがる、御供に隨れて、嚴に、堂々と宮殿に歸る。

＊

殆二週間以來、餘所では餘り出て來ない蠅がぶん／＼いつて居るそれが辛抱が出來ないやうにした。

然しマオリの人達はそれを喜んだ。何故なら鯖や他の魚が海底から表面にあがつて來る。蠅は漁業の時期、勞働の時期を告げ知らすからなのだ。タヒチでは勞働は滿足であるといふことを忘れるな。

皆は各自に自分の網の丈夫さや釣道具の吟味をした。女や小供は常とは違つた熱心を以て海岸や、陸と岩との間の珊瑚礁の上に網、むしろまあココヌスの葉の長い四目格子といつたものを曳くのを手傳つた。こんな仕方で餌にする魚がとられる。それは鯖には最も美味なのだ。

殆三週間を要した準備の終つたときに、双方を結びつけた二つの大きいピローヂが海におかれる。それの前面に釣針のついた非常に長い竿がもたせかけられる。その竿は後を縛つてある二本の繩で急に揚げられるのだ。魚は咬みつくやいなや直ぐ様引き揚げられ、小舟の中に入れられる。

或る天氣の好い朝私達（私は――無論――お祭の際にも一緒だつた）は海にのり出した。ところが幸に私達は直ぐに珊瑚礁の先きに

出られた。私達は可成り遠くまで出かけて行つた。漕いで行くときに水上に頭をだして此方を見て居る鼈を私は見た。漁夫達は皆非常に喜んで、急いで舵をとつた。私達はマラの洞穴と對ひあつた鯖穴といはれる場所に來た。そこは非常に水の深い處なのだ。

註—— Mara といふ字は佛教徒の言葉のうちにある。佛教では死といふ意味だが、そこから出て罪といふ意味になつた。

鯖は夜は其處の沙魚の來ることの出來ない深海でねむるのだと人人はいつてる。

魚を探しながら、海鳥の群は穴の上を飛んでゐる。一尾表面に出て來ると鳥は忽ち恐ろしい速さで、それを目がけておりて來、嘴に噬へるとまた高くとんで行く。

かうも海にも、空にも、私達のピローヂにすらも血と殺戮の思想が支配して居る。

何故長い釣絲を鯖穴のなかへ投げこんでをかないのか、と私が仲間に尋ねたら、彼等は、そんなことは出來ないんだ、神聖な場所だものと答へた。

——海の神樣が其處にござるんだ。

私は穴の底の傳説を想像した、それをどうか私に話させくれ。

*1

タヒチの海神のなかのロウア・ハトウ Roüa Hatou は此處の海底にね

むつて居る。

一人のマオリ人が或る時無鐵砲にも其處で魚をとらうとした。そのとき釣針が神の頭髮にひつかゝつた、神は目を覺ました。怒つて神は、彼の安眠を妨げるやうなそんな勇氣を誰が有つてるのか見てやらうと、表面にあがつて來た。そして罪人が人間であるのを見たときに、彼は一人の放埓を罰するために人間全體を絶滅してやらうと決心した。

だが然し刑罰をのがれた——言說以上の御慈悲に依つて！——犯罪者自身は。

神樣は彼に家族全體を連れてトア・マラマ Toa Marama に、その中の或るものには島、卽ち山に、他のものにはピローヂ、卽ち『箱船』に行くことを命じた。

漁夫が家族と供に命ぜられた場所にゆいた時、海の水はたかまり始めた。水は徐々に一番高い頂をも蔽ふてしまい、すべての生物は、かのトラ・マラマに遁れたものまでが、その中で死んでしまつた。後になつて彼等は更に新しくこの島に繁殖した。

註――この物語はマオリ人が試みたノアの大洪水の多くの説明の一である。

＊

私達は鯖穴を後に見棄てゝ去つた。ピローチの船頭は竿を海に入れて、針を投げる人を指定した。

永い間待たれた、鯖は一匹もかゝらない。

他の漕手の順番になつた。今度は美事な鯖がかゝつた、そして竿が下に曲つた、四本の頑丈な腕が後の紐を引いたので、竿は高くあがつた、そして魚は表面に見えた。然し同時に大きい沙魚が急に波の上を驅けた。恐ろしい一と咬、二た咬、そして最早釣針にはもぎとられた頭の他何もなかつた。

今度は船頭は私に合圖をした、それで私は針を投げた。ほんの僅の間に私達は大きい鯖を釣つた——多の人は氣がつかなかつたが、私は側の人達がくす〳〵笑つて私語してるのをきいた。——棒で頭を打たれて死んだ奴は小舟の底に引繰り返つてた。そして今は光を放つ鏡に等しいその體は澤山の輝く光線を放つてた。

二度も同じ樣に私は仕合せだつた。

私の仲間はよろこんで私を祝して、私を幸運兒と呼んだ。私は得

意になつて反對はしなかつた。然し皆が一緒になつて賞める中に、最初の時と同じく譯のわからない笑さ私語とを私は氣付いた。

釣魚は晩までかゝつた。餌の小魚がつきたときには、太陽は水平線を赤い焔で染めてゐた、そして私達の小舟には美事な鯖が十匹も積まれた。

私達は歸りの用意をした。すべてが整ふ間、私は若い男に、全く低い聲で取り交はされた言葉の意味と、二度も私のつれたのと一緒だつた笑とを尋ねた。彼は答ふるのを躊躇した。然し私はゆるさなかつた。何故なら私はマオリの抵抗力といふものが如何に小さいか、又如何に速く頑强な肉薄にまけるかといふことを知つてたからだ。

到當彼は私に打ちあけた。鯖が釣針に咬みつくと――私のは二匹

ともそうだつた――彼のヴヒナは家で不義をして居る。

私は信じないで笑つた。

そして私達は歸つた。

熱帶では夜は急に入りこんで來る。それに先きだつことが大事だ。二十四の輕快なパガイ(杓子の様な舵)が一時に水につかつた。そして元氣をつけるために漕手は拍子をとつて大聲で叫んだ。私達のピローヂは燐光のする波狀を後にひいた。

私は狂はし遁走をやつてるやうな心持になつた。激怒した大洋の統治者が私達を追ひかけ、怪異な不定な姿の群のやうに、驚かされた、珍らしもの好きの魚が私達の周圍に急いで來た。

二時間して私達は一番端れの岩に着いた。

其處は浪が强い、航行は航路故に危險である。うまく砂地をよけ

てピローチの舵をとることは容易ではない。然し土人達は熟達して居る。私は全く恐くはなかつたけれど、非常な興味を以て、この美事に行はれる手際を見詰めた。

私達の前方には、陸は炎をあげてる火で照された。――それはココヌスの枝の大きい松明であつた。輝いてる海岸の砂上に陣取つてる漁夫達の家族の顔附きは異様であつた。あるものは動かずに坐はつた、他のものは松明を振りながら海邊を驅けてた。小供等はあちこちに跳ねまわつてた。そして遠くには清澄な叫のするのを聞いた。輕々しく走つて私達のピローチは海濱に着いた、そして獲物の分配が直ぐに始まつた。

魚は皆地面の上におかれた。親方が人の數――男、女、小供――漁獲と餌の魚捕りに關係しただけの同じ部分に分けた。

それは三十七に分たれた。そして時を失することなく、私のヴヒナは斧をとつて、木を裂き、夜が寒いて火を點けた。その間に私はなほ少しみなりをなほして、夜が寒いのでからだを包んだ。

私達二人の分配のうち一部分は煮て、他をテフラは生のままで貯いた。

それから彼女は魚釣りでいろ〳〵の出來事を根を掘つてきいた。そして私は親切に彼女の好奇心を滿足さした。彼女はすべてに滿足して、小供らしく晴々しくなつた。そして私は秘めてた思を氣づかせないやうに彼女を觀察した。私の心底には何等の原因もなくて鎭まらない不安が目を覺ましてた、私はテフラに問ひかけてやらうと焦つた――ある問を……そして『何のために？』と自問しても、そ

れは何の役にもたゝなかつた。『誰が知るものか』と私は自分に答へた。

*

眠りに就く時が來た、そして私達二人が、列んで體をのばして横になつたときに、私は突然尋ねた

――お前は正氣かい。

――え。

――そんならお前の男はお前の氣にいつたのだね

――私、好きな男なんか居ない。

――嘘をいへ、魚が裏切つてるよ。

テフラはおきあがつて、じつと私を見つめた。彼女の顔附は珍しい神秘的な莊嚴な表情をした。それは私には見馴れないものであり、又彼女の明るい全く小供らしい顔にはまだ一度も見たことのないものであつた。

私達の小さい家のなかの陽氣は變つて了つた。私は崇高なるものの私達の間に高まるのを感じた。私は意志をまげて信仰の力に屈し、天上からの福音を待つた。私は福音の來るだらうといふことを疑はなをつた。たとへ吾々懷疑說の無益な疑義が、それが迷信にもせよ、この輝いた尊い熱情に相對して、なほその力を自分の上に擅にしやうとも。

テフラは戶がちやんと締められてるかを確めるために、靜に戶の

方に行つた。そして部屋の中頃まで戻つて來たときに、彼女は、次の祈禱をあげた。

私をお助け下さい。

私をお助け下さい。

今は夕で御座居います、夕には神樣がお居でになる。

私をお守り下さい、おゝ私の神樣。

私をお守り下さい、おゝ私の御主。

だぶらかしや惡い告げ口の前に私をお守り下さい。

私をお守り下さい、餓に死にますことの前に、

惡の前に、そして呪咀の前に、

私をお守り下さい、土地の分け方の爭の前に、

私共の間に平和の支配することの出來ますやうに。

おゝ神樣、狂氣の武士の前にお守り下さい。
私をお守り下さい、私を脅かすものゝ前に、
苦しめることをよろこぶものゝ前に、
その頭髮がたえず逆立つてる人の前に。
私と私の魂とが生きることの出來ますやうに、
おゝ神樣。

この夕本當に私はテフラと一緒に祈つた。
彼女がその祈禱を終つたときに、彼女は眼に涙をためて私の方に來た、そして自分を打つてくれとたのんだ。
この表情の深い眞摯の前に、この生きてる像の完全なる美の前に私はテフラに宣誓された神が彷彿するやうに思つた。
私の手は永久に呪はれる、若し私の手が自然の傑作に對して自分

をたてやうと敢てするならば。

彼女は自分を打つてといふ懇願を繰返した。

――なさらないのなら、あなたは永く怒つてゝ病氣におなりだ。

私は彼女に接吻をした。

そして誤解なしに彼女を愛する今、私が彼女を驚嘆するやうに愛する今、佛陀の言葉が私の唇邊に來たつた。

『そうだ、人は柔和に依つて憤怒を鎭め、善に依つて惡を鎭め、眞に依つて僞を鎭めなければならない』

この夜は神々しかつた、他のすべての夜よりも貴かつた――日は輝いてあけた。

朝早く彼女の母が鮮しいココスヌスを有つて來た。

一眼見て彼女はテフラに尋ねた。

彼女は知つた。

優しい表情をして彼女は私にいつた。

――あなたは昨日魚釣りにいらつしたつて、お變りは御座いませんでしたか。

私は答へた

――また早く行きたいと思ひます。

＊

私はどうしてもフランスに歸らなければならなくなつた。重大な家の事情が私を呼び戻した。

愛相好き土地、自由と美の故郷よ、幸あれ。

二年たつた、そして私は二十年だけ若くなつた、私は來たときよりも野蠻に、然し賢くなつた。

野蠻、無知はこの老いた文明人に多くのこと、藝術のうちに生き、幸福であることを敎へた。中にも彼等は私自身をもつと好く知れといふことを敎へた。私は彼等から唯深い眞理をきいたのだ。

それはお前の奇蹟であつたのだ、お前、秘密多き世界よ。お前は私に光を有つて來た。そして私は古代の美と自然の消すことの出來ない若々しさを驚嘆して成長した。

お前の人間の心も、咲くことをやめない、そしてその香を最早誰も吸込めない、その花とへの理解と愛とは私を善良にした。

私が乗船するために、埠頭を去つたときに、私はテフラを最後に見た。
彼女は終夜幾晩も泣きあかした、今は彼女は涙もつきて、悲しげに、然し石の上に脚を垂れ下げて坐つてた。そして彼女の丈夫な、頑丈な足は汚い水に觸れてた。
朝耳の後につけてた花は萎びて膝の上に落ちてた。
此處にも、彼處にも彼女と同じ様に他の人達は疲れて、默つて、悲しげに、ぼんやりして、私達を永遠に遠く運んで行く船の濃い烟に見とれて居た。
そして船橋から私達には、私達が段々隔つて行く間、望遠鏡を有つてその唇の上にはなほ永くかのマオリの歌を唄つてるやうに思は

れた。

南、東の穏かな風よ
それは私の頭の上で可愛い遊戯を共にする、
隣の島へ急いでおいで。
そこでお前は可愛いらしい樹蔭のなかで
私をすてた　あの人に會はう。
涙にくれてる私を見たと　告げてくれ。

――(完)――

附録

繪畫論

繪畫は最も立派である。繪畫のなかにはあらゆる感じが包含されて居る。一目見て誰でも自分の想像の振動に從つてローマンスを作ることが出來、又深い回想に依つて自分の心臟をみたすことが出來る。何等の記憶の浪費といふことがない、すべては瞬間を包容する——完全なる藝術、それは他のすべてのものを一つにし、それらを完成する。音樂のやうに繪畫は感覺を通じて心の上にはたき、調和のあるトーンは音響の調和に該當する。然し音樂には求められない統一に繪畫は達する。音樂は音の繼續といふことに基礎をおき、その發端と結末とを一緒に纒めやうすれば、精神は疲かれてしまふ。

耳は全體として見るに眼よりは低級な感覺である。聽覺は唯一度に一音だけである。之に反して視覺は一目のうちにすべてを包攝し、そしてその際自分の思ひのまゝに單純化する。

人は音樂を聞き、畫像を見るといふと、自分の夢を靜に自分に與へることが出來る。書物では人は著者の奴隷になる。

文章家は情緒への道を發見する前に、知能に自分を向けなければならない。熟慮に依つて達せられた感じは直接性を失はう。

唯視覺だけが直接の効果を産む。書物を批判するためには知能と智識とが要る。繪畫と音樂とを批判せんためには、知能と藝術上の智識との外にまだ自然に於ける特別なる感じが要る。一言でいへば、人は藝術家として生まれなければならないのだ。多くのものは然し呼びかけられては居る、そして唯少數のものだけが選ばれる。各個

の觀念といふものは形式化せられる、然しそれは感情通りの感じとはちがう。彼の恐怖、彼の熱中の瞬間を制御せんためには、どれだけの努力が要るか。戀愛は往々にして屢々最初の瞥見に於ておこるではないか、そして戀愛は何時も盲目ではないか。そしてその際思想は自から精神と呼ぶ、本能、神經、情緒は物質の一部分を作るのだ。何といふアイロニーだらう。

一番不定で、一番摑みにくい、一番變はるものが物質。思想は感じの奴隷。

人間以上に自然はたつてる。

人間の思想が言葉に依つてあらはされる、それが文學である。

オセロが猜疑に胸を喰ひつぶされて、デスデモネを殺したときに、オセロがたとへどんなに生々と描かれやうともオセロが運命を孕ん

だ額をして部屋のなかに突進した態を自分の眼を以て見たときに、私の印象は幾倍強かつたらう。これ故に諸君は諸君の作品を完成するために舞臺が要るのだ。

諸君は暴風雨を人の氣を惹くやうに叙述することは出來る。然し暴風雨の感じを與ふることは諸君には手がとゞかない。

數の場合のやうに器樂は基底に統一を有つてる。全體の音樂の組織はこの原理の上にたつてる。耳は分音に慣れてる。それで諸君は他の基底をとることが出來る、正音、半音、四分音をつゞけてとることが出來る。この範圍の外では音調は不調音に陷る。眼は不調音を感ずるには耳よりも慣れてない。然しその代りもつと複雜な、もつと大きい錯雜した分音が多くの統一に相對してたつてる。

樂器は一つ音から出立する。繪畫は多くの音から出立する。黑を

以て始め、白に至るまで分ける――これが最初の統一、一番簡單な一番多い、從つて最も摑み易い統一である。然し虹のすべての色をとり、それらに複合された色に依つて作られた統一を附け足し、そして統一の驚くべき數に至る。畫家は色彩の法則を余り知らず、公衆はそれを余り理解してないといふことは、この豐富に際して驚くほどのことではない。然し自然に密接な關係にあらはれる爲めには如何なる充實が要る。

畫家が色を混ぜずに並べておくといふと、ひどく非難をする。然しこの領分に於ては私達は勝利を主張しなければならない。私達は自然をこの論爭に於ける最强の後援に呼び寄せることが出來る。何故ならば自然が一體そうなのだから。

赤と列んだ綠は混合色の赤褐色を生ずるのではなく、二つの振動

してる響を生ずるのだ。赤と列べてクローム黄をおくと――三つの色響が雙方からお互に豐富になり、そして第一のトーン、黄の强度を增す。

黄の代りに青をおくと、そうすると力に依つて振動し、お互に雙方から給しあつて、三つの違つたトーンが出來る。

黄の代りに菫をおくと、そうすると赤の調子の唯一つの複合したトーンが出來る。

結合は無制限である。色の混せ合せは汚ないトーンを產む。唯一つの色は生硬である、そんなものは自然には存在しない。それは虹に於て明に見られる。然し豐富な自然は一つの色が他の色からおこつてくるやうに意志され、變らざる秩序に於て相列んで私達にあらはれるやうに用心してる。

さて諸君は自然よりも不充分な手段を有つてる、そして自然が諸君の手のなかに與へたものを斷念しやうと判決を下してる。諸君は自然のやうにそんなに多くの光を有つてるか、又太陽のやうにそんなに多くの熱を有つてるか。そして諸君は誇張といふことをいふ。然し諸君が自然の後に瞠若たる場合に、どうして諸君は誇張を望めやう。

諸君が誇張といふことで各自の見惡くい平凡な作品を理解したとしても、諸君はこの意味に於て正しいのだ。諸君の作品も亦臆病で光澤がないといふことを私にいはせて下さい。それは、若し調和を害するものならば、誇長されたのである。

だが調和の法則があらうか――ある。

まきしく色彩畫家の感情は自然の調和に該當する。歌ひ手のやう

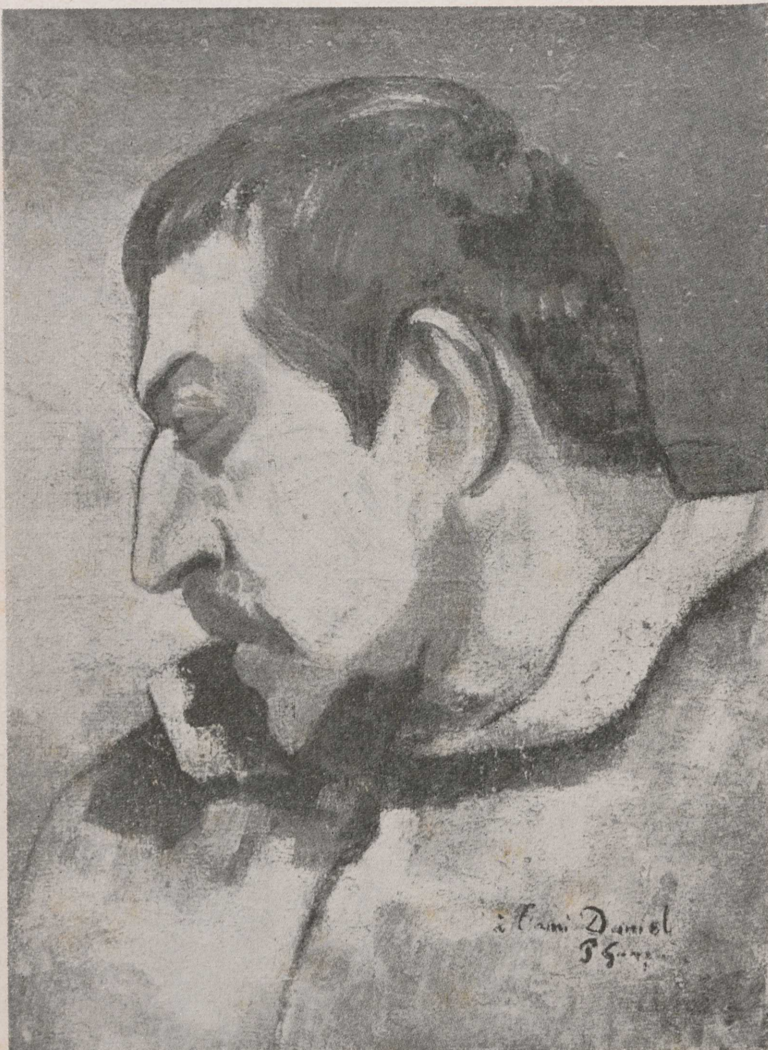
に畫家も時たま間違つて唄う、畫家の眼に調和がかける。段階を經て徐々に調和の方法が發達する。それはかうだ。人はアカデミーに行くとか、若しくは多くの畫室に行くとかいふやうなものだ。實際繪當の段々を二つの範圍に分ける。先づ物を素描することを習ふ、次に彩畫をならふ。それは、すでにきまつたコントゥルに色をつけ、像を描くといふことゝ同一のことなのだ。

今までにこの進み方で唯一つことが明になつたといふことを私は知らねばならない。それはかういふことだ。人は色彩といふことを附けたりの余事と見たといふことである。描く前に好く形をとるといふことが大事だ——このことは何等の矛盾をも生ぜしめないトーンのなかに決算せられる。この外えらいいいさんまなことが何時もかういふ仕方でいはれる。

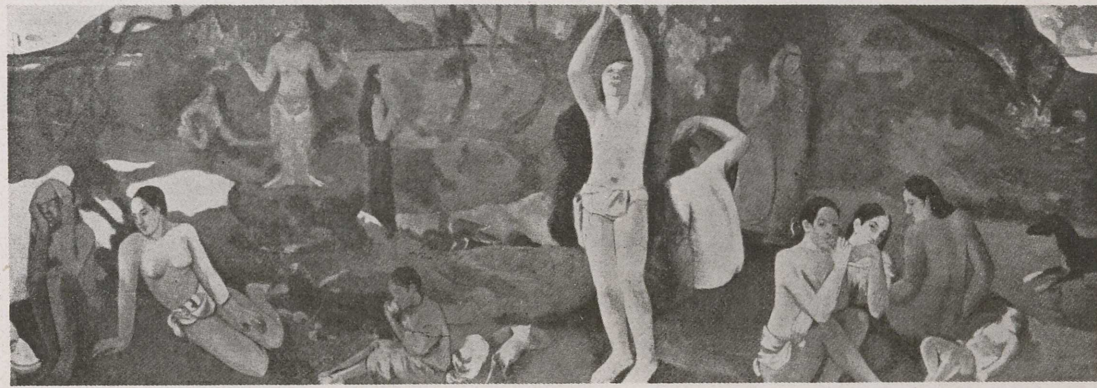
人は手袋の代りに長靴をはめるか。人は素畫は色彩に依つてきめられない、その反對だといふことを眞面目に證據だてることが出來るか。色彩に依つてみたすことに依つて同じ素描が小さくも、大きくも見せられるといふことを私は自分に證據たてる義務を帶びてる。人はレムブラントの頭を全く同じプロポーションで素描したり、色彩が同時に不調和になる間に、人は如何なる無形式に達するかといふことを納得せん爲たルーベンスの色の配合をやつてみたりする百年來人は素描を要求する爲めに非常なる總額を支出した。畫家の數は一歩を先きへおこさずにのぼつた。私達は今日如何なる藝術家を賞讚するか、流派と戰つてるもの、彼等の智識を自身の自然の觀察から引きだしてるものをだけだ。

挿畫目次

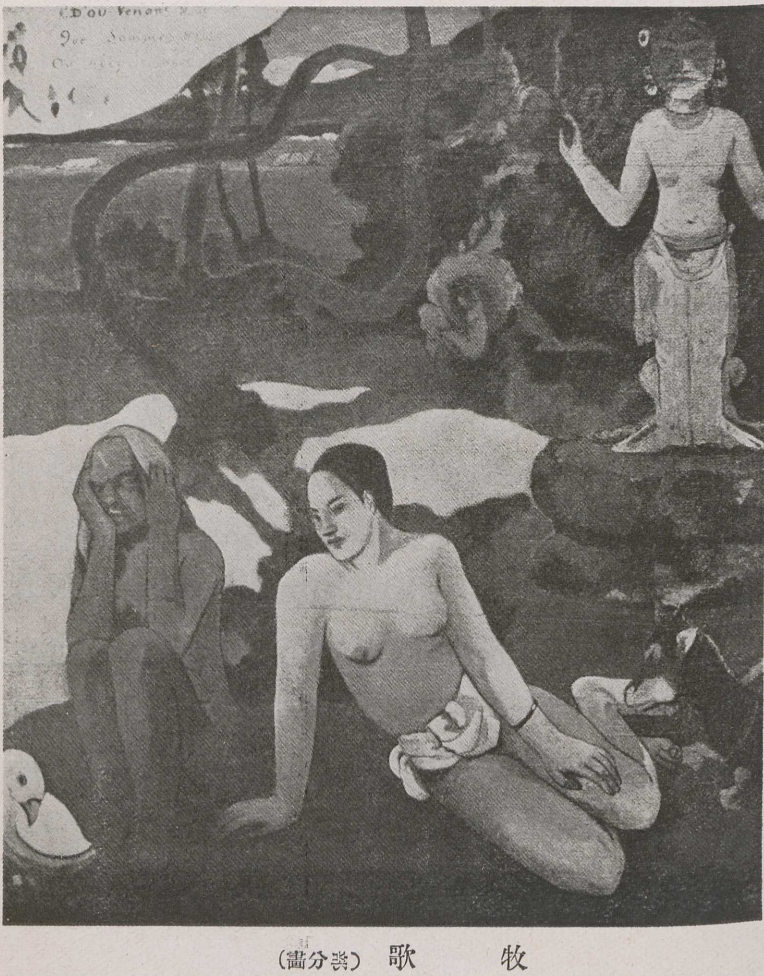
巻頭マルケサス島にて



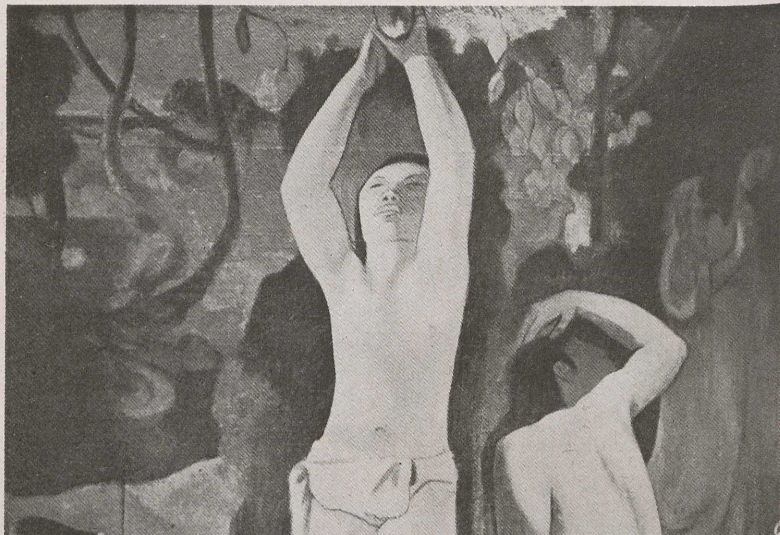
自畫像



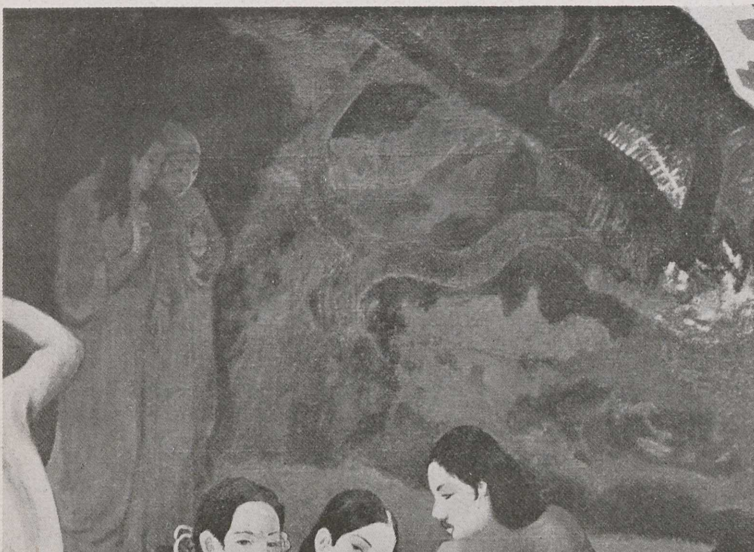
牧歌



牧歌（龔分畫）



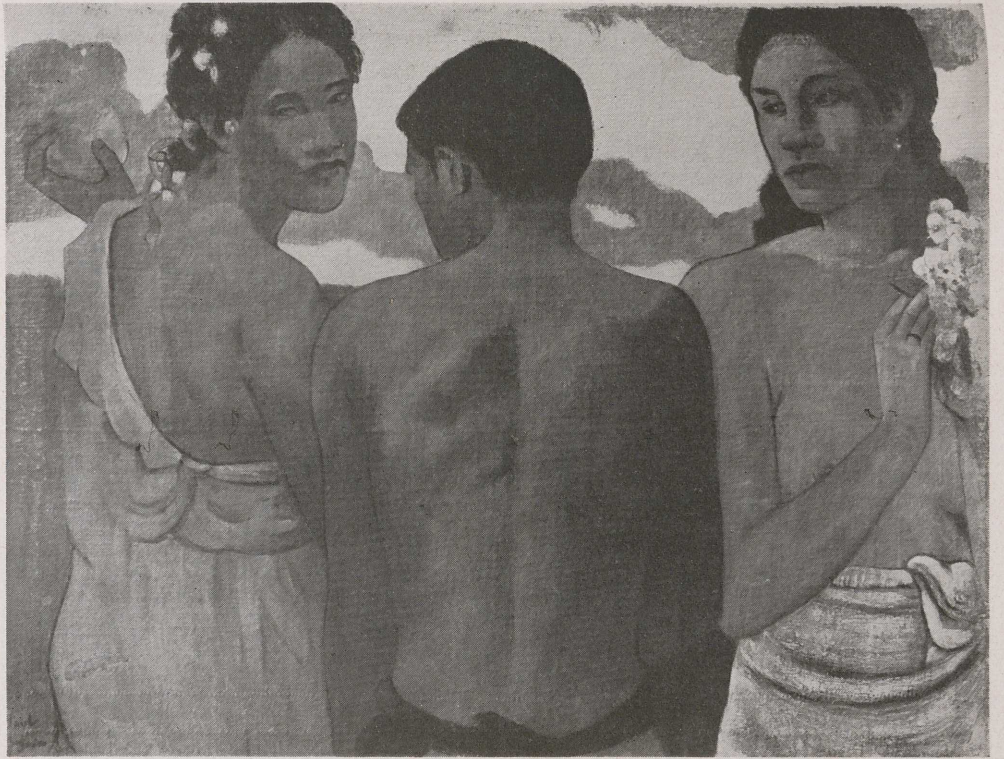
牧歌（部分畫）



牧　歌（部分畫）



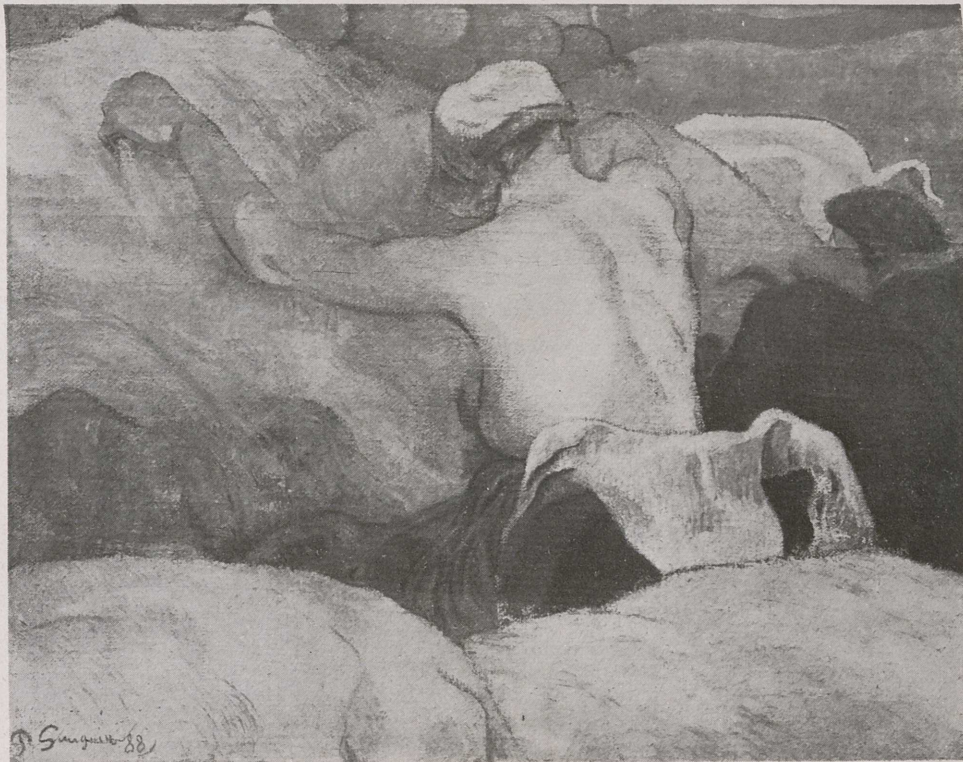
憩ひ



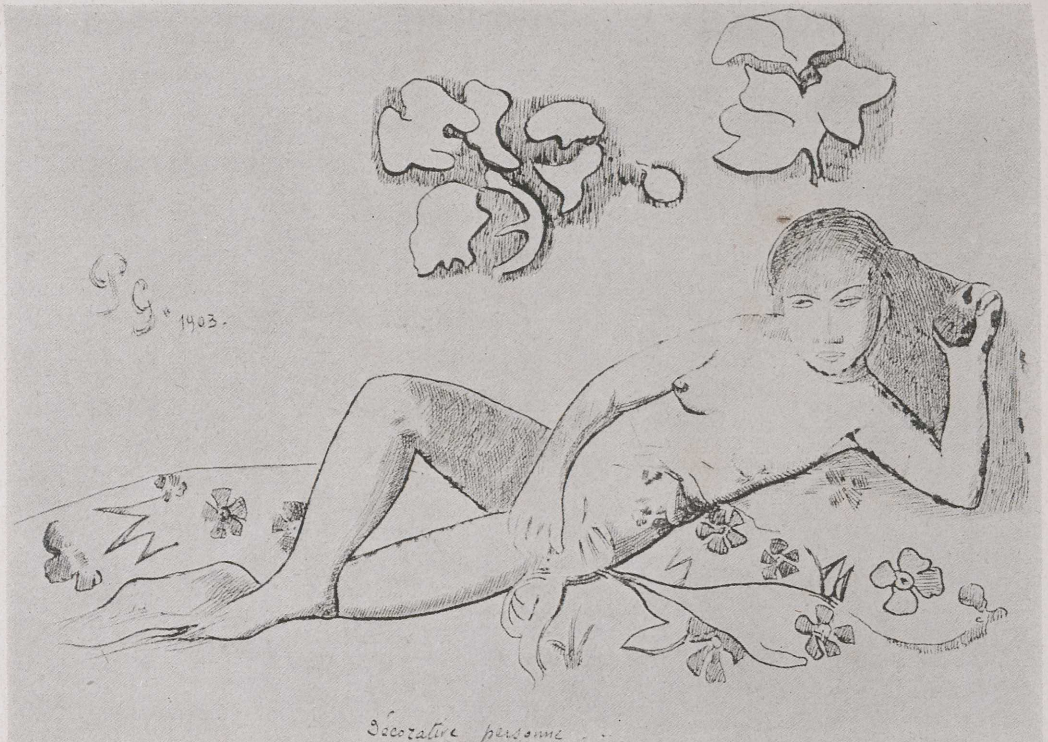
タヒチの男女



偶像



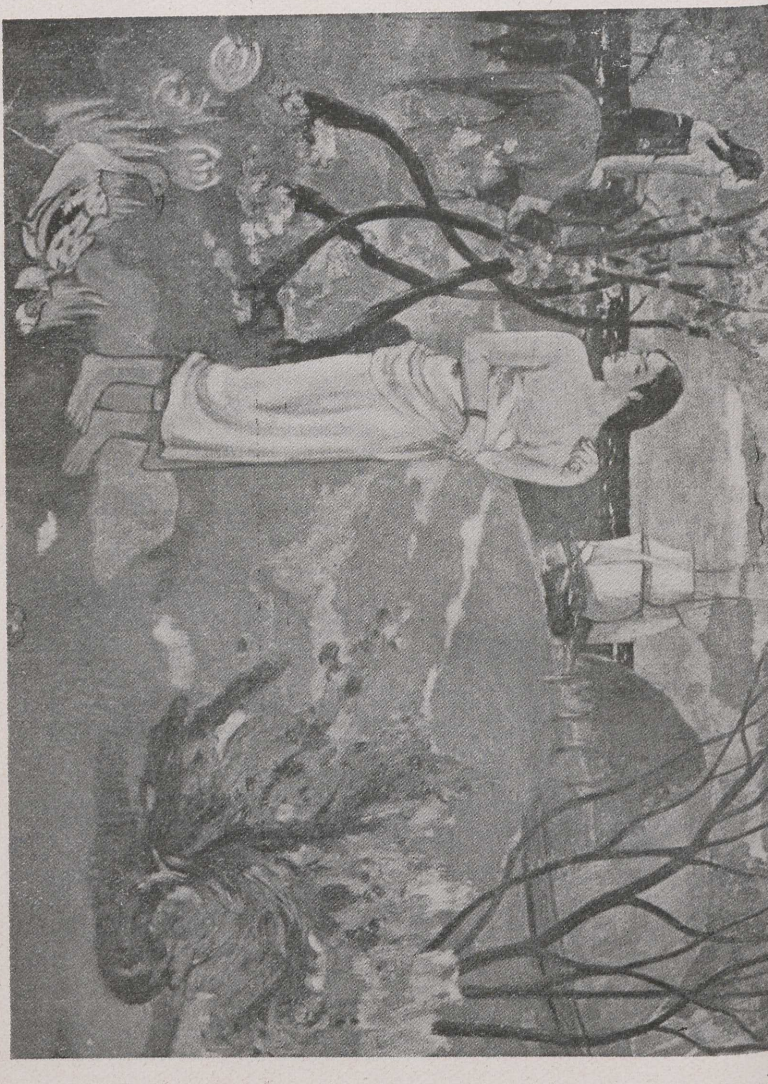
習作



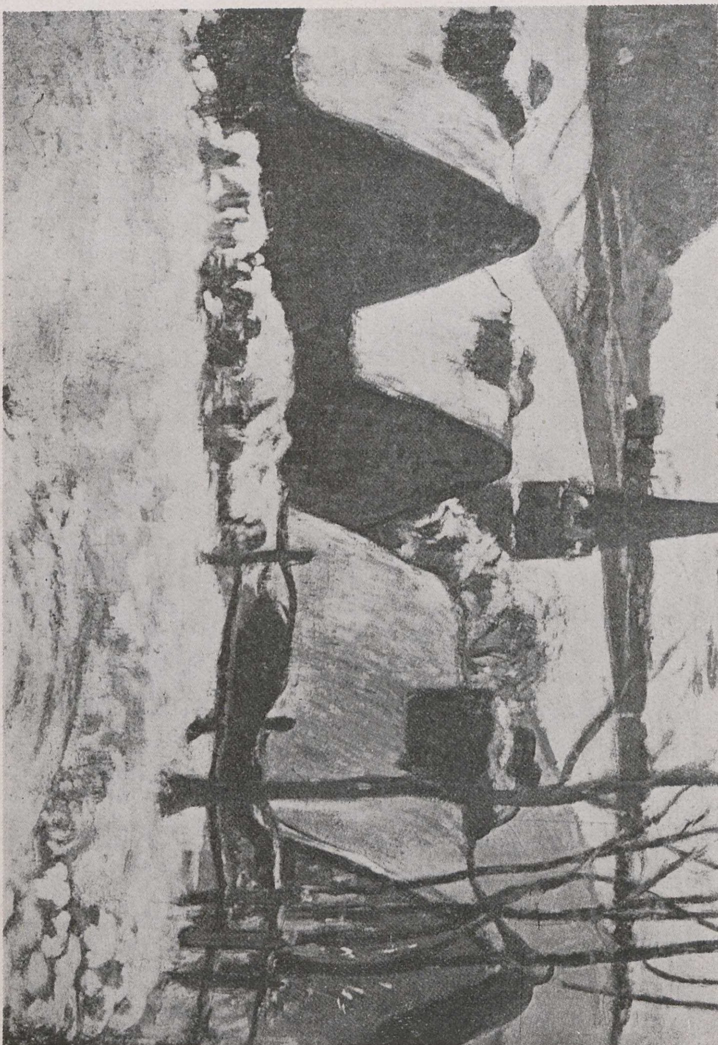
習作



素描



マルケサス島にて



風景



ヤコブの格闘



ゲネサレの基督



ピエタ



女



浮彫

大正十二年五月廿五日印刷
大正十二年五月三十日第一版印刷
大正十二年六月十日第二版印刷
昭和四年六月廿日普及版印刷

定價　金壹圓

ノア・ノア

著譯者　小泉鐵

發行所　東京市神田區通神保町二番地　小川鐵之介

印刷者　東京市牛込區早稻田鶴卷町三〇八番地　石原勘一郎

發賣所　東京市神田區通神保町二番地　文川堂書房　白樺社

48,—